
トーキョー発、舞台芸術の祭典

F/T 13

フェスティバル / トーキョー

プレスリリース
PRESS RELEASE

2013年8月28日

お問い合わせ

フェスティバル / トーキョー実行委員会事務局 担当：松本、平、望月

電話：03-5961-5202 ファクス：03-5961-5207 Eメール：press@festival-tokyo.jp <http://festival-tokyo.jp>

〒170-0001 東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすがも創造舎 NPO法人アートネットワーク・ジャパン内

目次

開催概要、開催趣旨	3
F/T13コンセプト	4
F/T13プログラム構成	7
[主催プログラム]	
『オーバードーズ：サイコ・カタストロフィー』	
シアタースタジオ・インドネシア	8
『四谷雑談集』+『四家の怪談』中野成樹、長島 確	10
『東海道四谷怪談 一通し上演』木ノ下歌舞伎	11
『東京ヘテロトピア』Port B	12
『永い遠足』サンプル	13
ラビア・ムルエ連続上演	14
▶ 『33rpmと数秒間』	
▶ 『雲に乗って』	
▶ 『ピクセル化された革命』	
『現在地』チェルフィッチュ	17
F/T13イエリネク連続上演	
▶ 『光のない。(プロローグ?)』演出・美術：小沢 剛	18
▶ 『光のない。(プロローグ?)』演出：宮沢章夫	19
『100%トーキョー』リミニ・プロトコル	20
『The Coming Storm—嵐が来た』フォースド・エンタテインメント	22
『ガネーシャ VS. 第三帝国』バック・トゥ・バック・シアター	24
『石のような水』作：松田正隆、演出・美術：松本雄吉	26
F/Tシンポジウム	27
[オープン・プログラム]	
F/T13 オープニング・イベント	28
F/Tモブ・スペシャル	29
『KEINE STIMME.—声のない。 inspired by EPILOG?』椿 昇、	
F/Tステーション	30
[公募プログラム]	
公募プログラム	31
[連携プログラム]	
連携プログラム	34
チケット情報	34
実行委員会、事務局クレジット	35
広報用写真一覧	36
別紙：主催・公募プログラム公演カレンダー	

名称	フェスティバル/トーキョー 13 (第6回フェスティバル/トーキョー)
会期	平成25(2013)年11月9日(土) - 12月8日(日)
会場	東京芸術劇場、あうるすぽっと、にしすがも創造舎、シアターグリーン、アサヒ・アートスクエア ほか
プログラム	F/T 主催プログラム 15演目、1企画 F/T 公募プログラム 9演目 F/T オープン・プログラム 4プログラム F/T 連携プログラム 6プログラム
主催	フェスティバル/トーキョー実行委員会 東京都/豊島区/アーツカウンシル東京・東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)/公益財団法人としま未来文化財団/NPO法人アートネットワーク・ジャパン
共催	公益社団法人国際演劇協会(ITI/UNESCO)日本センター
協賛	アサヒビール株式会社、株式会社資生堂
助成	公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団
後援	外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会
特別協力	西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、チャコット株式会社
協力	東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋インバウンド推進協力会、池袋ホテル会
メディアパートナー	ART iT、J-WAVE 81.3 FM、新潮、CINRA.NET、美術手帖
ホテルパートナー	サンシャインシティプリンスホテル、ホテル メトロポリタン、ホテル グランドシティ、サクラホテル池袋
地域パートナー	池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人ゼファー池袋まちづくり
宣伝協力	株式会社ポスターハリス・カンパニー、有限会社ネビュラエクストラサポート(公募プログラム)
会場協力	アサヒ・アートスクエア(公募プログラム)
認定	公益社団法人企業メセナ協議会(申請中)
平成25年度 文化庁	地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

F/T13

フェスティバル/トーキョー

開催趣旨

フェスティバル/トーキョー(F/T)は過去5回の開催を通じ、東京、日本、そしてアジアを代表する舞台芸術祭として定着し、東京から世界に向けて、時代と社会に向き合う新しい価値を創造・発信し続けてきました。そこで製作・上演された作品の多くは、国内はもちろんアジアや世界の諸都市のフェスティバルにも巡回し、世界の芸術潮流に影響を与えています。

第6回となるF/T13では、東京の都市空間の魅力を引き出し、都市を挙げての祝祭感をいっそう盛り上げるため、池袋エリアを中心に大規模な参加型プロジェクトを多数実施します。どなたでも気軽に無料でご参加頂けるオープニング・イベントやF/Tモブをはじめ、野外公演などを集中的に展開する一方、地元の商店街や地域固有のコミュニティとの連携を深めます。

主催プログラムでは、演劇の基本要素であるドラマやフィクションを再び問い直し、同時代の物語の新しいあり方を探求します。古典戯曲や神話などを今日の文脈で捉え直す作品や、社会状況の変化に対応した新たな語りの形式を探求する作品を多数製作・上演します。

4回目となる公募プログラムは、若手の登竜門としてアジア地域に広く浸透し、若い表現者が目標とするプラットフォームとしての役割を高めています。今回、応募総数137件から選ばれ6つの国・地域から参加する9団体の作品は、アジアの多様性を体現し、新世代における対話と批評の共有を促すことが期待されます。

このような取り組みを通じ、フェスティバル/トーキョーは、東京からアジア、そして世界へ、都市・東京の文化的な魅力やプレゼンスを強く発信し、またそこに暮らす人々の創造的ポテンシャルの向上に貢献すべく、さらなる飛躍を目指します。

フェスティバル/トーキョー 主催者一同

東京文化発信
プロジェクト
とは

東京文化発信プロジェクトは、「世界的な文化創造都市・東京」の実現に向けて、東京都と東京都歴史文化財団が芸術文化団体やアートNPO等と協力して実施しているプロジェクトです。都内各地での文化創造拠点の形成や子供・青少年への創造体験の機会の提供により、多くの人々が新たな文化の創造に主体的に関わる環境を整えるとともに、国際フェスティバルの開催等を通じて、新たな東京文化を創造し、世界に向けて発信していきます。www.bh-project.jp

物語は、人類のあらゆる時代、社会の中に存在している。古くは神話や民話、年代記から、寓話や宗教の教典、小説や戯曲に至るまで、人類は実に多様な物語とともに文明や共同体を築いてきた。実際の出来事に基づくものから奇想天外なフィクションまで、人間の想像力が紡ぎだしてきた無数の物語は、時代や空間を超えて受け継がれ、様々なバリエーションに進化しながら、テレビ、マンガ、ゲーム、コマーシャル、マーケティング、ネット掲示板、都市伝説など現代のあらゆるメディアや語りの中に入り込み、私たちの行動や精神に深く作用している。

また物語は、共同体においてのみならず、私たち個人が生きていく上でもなくてはならないものだろう。私たちは普段、「わたし」という物語を絶え間なく更新しながら生きているが、そのことを敢えて意識する必要はない。だがある瞬間、その物語が何らかの理由で断絶し、継続不可能になったとき—、突然日常に亀裂が入ったとき、大切な人を亡くしたとき、自分の心身が危機に陥ったとき—、私たちはそれまで自分が紡いできた「わたし」という物語の存在とその損失を前に、再び自分自身に問いかけるだろう。「私(たち)はどこから来たのか? 私(たち)は何者か? 私(たち)はどこへ行くのか?」と。そして再び、「私(たち)」という物語を紡ぎ始めようとするのではないだろうか。

哲学の世界では、かつてジャン＝フランソワ・リオタールという思想家が「大きな物語の終焉」を提唱し、近代社会を普遍的に規定する価値観や歴史、社会システムといった大きな枠組が相対化された。しかし、それから30年後を生きる私たちは、現実の世界において「大きな物語」が終わることなどないことを知っている。どんなに世界が断片化し、「小さな物語」が無限に乱立しようとも、人々は依然「大きな物語」の不在に耐えることはできず、むしろより単純化され「大きな物語」を捏造し、しがみつこうとする。3.11以後を生きる私たちは、こうした時代の空気感を感じながら、あらためて「物語」の役割と表現について考えていかなければならないだろう。物語とは何か。それを語る主体とは誰か。そもそも、その物語を語る権利は誰にあるのか。単純な共感や同化、同調のための道具ではない物語とはどんなものか。メディア環境の劇的変化にしたがって、物語の生成・消費・再生の有り様も変容した今、演劇というメディアには、いかに物語を語り続ける可能性が残されているのだろうか。

これらの問いと向き合うために、今回のF/Tでは、「物語を旅する」というテーマのもと、時代と空間を超えて様々な物語と出会い直していきたい。遠い歴史から未来のフィクションまで、個人の小さな物語から壮大な神話まで、人間の想像力が生み出した多様な物語を縦横無尽に巡る旅を経て、私たちはいかに、私たち自身の物語を語り、未来に向けて更新することができるだろうか。

3.11は、私たちに現実が虚構を超えてしまう恐怖と虚無感をもたらしたが、そもそも人類はこれまでも幾度となく、コ

物語を旅する

相馬千秋 F/T プログラム・ディレクター

ントロール不能な自然や語り得ない歴史を経験してきたはずだ。その度に人間は、事態を乗り越えて再び世界を構築するために、あらゆる想像力を駆使してフィクションを生み出してきたのではないだろうか。オーストラリアの劇団バック・トゥ・バック・シアターは、ヒンドゥー教の神ガネーシャが、ヒトラーに奪われた幸福の象徴、卍の紋章を取り戻しに時空を超えて旅をするという奇想天外なフィクションによって、ファシズムへの批判をユーモラスに描き出す。昨年、竹を使った大胆な野外パフォーマンスでF/Tアワードを受賞したナンダン・アラデア率いるシアタースタジオ・インドネシアは今回、1883年に発生し世界を衝撃と混乱に陥れたクラタカウの大災害の史実から着想を得、人間と自然の拮抗を神話的なフィクションへと昇華させる。一方、3.11以後の日本において、複数の表現者がリアリズムからフィクションの探求へと興味を移行させ始めたのは単なる偶然ではないだろう。20世紀ロシア映画の巨匠アンドレイ・タルコフスキーは、チェルノブイリ原発事故が起きる以前に『ストーカー』『サクリファイス』といった映画において核の脅威を予言的に描いたことで知られているが、今回劇作家・松田正隆と演出家・松本雄吉は、タルコフスキーのイメージを引き継ぎながら、フクシマ以後を映すあらたなフィクションの創造に挑戦する。チェルフィッチュの岡田利規も、震災後に書き下ろした『現在地』において、ある共同体に去来する目に見えない変化と不安を前にした心の揺らぎを、SF的な手つきで浮かび上がらせる。これらの作品を通じて、再び演劇におけるフィクションの力を考えてみたい。

また演劇は古くから、神話や宗教の教典などと並び、その時代や共同体で必要とされる物語を、戯曲というメディアを通して継承する役割を担ってきた。ギリシャ悲劇から近代戯曲、日本の古典戯曲に至るまで、古今東西に存在する戯曲は、いわば「物語のデータベース」として時代や地域を越えて共有され、実に多様な形態や文脈の中で、時代や社会に応じて活用されてきた。このような戯曲の豊かな有り様は、今日でも多くの表現者の想像力を刺激し、そこにあらたな解釈や介入を生み出している。二次創作、N次創作とも言われるこうした物語の拡張性を、今、演劇の想像力はどのように引き継ぎ、発展させることができるのだろうか。この問いを考えるために、これまでも数々のクリエイターが挑み、江戸の世から語り継がれてきた物語『四谷怪談』を素材にした創作を2組のチームに委嘱した。古典芸能への深い知識と興味から歌舞伎の再創造を目指す木ノ下裕一率いる劇団・木ノ下歌舞伎は今回、演出に杉原邦生を迎え、四世鶴屋南北の歌舞伎狂言『東海道四谷怪談』を同時代の群衆劇として提示する。これまでも海外戯曲の大胆な翻案を手がけてきた中野成樹は、ドラマトルクスの長島確との共同作業で、『東海道四谷怪談』の原典とされる『四谷雑談集』に注目し、実際に起きた史実としての「出来事」と、『四谷雑談集』から浮かぶ「物語」、今回あらたに中野に自身によって創作される「フィクション」の3つの層を、江戸／東京の都市空間の中にインストールする。江戸／東京の時空や複数

の登場人物たちを横断しながら、私たちはどんなパラレルワールドを体感することができるだろうか。また、これまでもドラマやキャラクターにこだわり現代の寓話を創り続けてきたサンプルの松井周は今回、ギリシャ悲劇の「オイディプス」の二次創作として、動物や植物、人類を横断する生命倫理の問題に深く切り込む物語の創造に取り組むことになる。

一方、歴史や国家システム、イデオロギーなど、近代社会の中で人間が生み出してきた「大きな物語」は、私たちの生活や思考、共同体に共通の秩序や枠組みを与える反面、そこに属さない人々、そこからこぼれ落ちる匿名の「小さな物語」をかき消してしまう危険性も孕んでいる。震災後に日本を覆い尽くしたスローガンや政策、歴史認識の違いから強まる隣国との緊張関係なども、ともすれば安易な「大きな物語」へと回収されないとも限らない。そのとき演劇は、その誘惑に抗して、いかに固有の物語、複数の物語を紡ぎ直すことができるのだろうか。この問いに対するアプローチとして、「アラブの春」という大文字の歴史の渦中にある中東・アラブ地域から、ラビア・ムルエらによる3つの最新作を特集する。アラブの春に失望した架空のアーティスト／アクティビストの自死、レバノン内戦で障がいを持ったムルエの実弟の人生、泥沼化するシリア内戦での市民ジャーナリストたちの死。これら3つの物語は、それを表象するソーシャルメディアへの鋭い分析も内包しながら、私たちの前に物語／歴史に対するミクロで鋭い視点を提示するだろう。また昨年の連続上演で話題を呼んだオーストリアのノーベル賞作家、エルフリーデ・イエリネクは、『光のない。』『光のないII（福島—エピローグ?）』に続き、『光のない。（プロローグ?）』という短編戯曲を発表した。フクシマ後の世界にさらなる一石を投じるこの戯曲の演出を、今回あらたに2人の作り手に委嘱する。宮沢章夫は今回、能の形式を参照しながらイエリネクの言葉と死者の世界を結びつける試みに挑戦する。また小沢剛は、美術家ならではのアプローチとして、イエリネクの言葉を視覚的に受容するインスタレーション／パフォーマンスを創作する。イエリネクの言葉を引き受ける2人の作り手は、フクシマ後という途方もなく大きな物語に対峙しながら、私たちの眼前にどんな仮想世界を出現させてくれるのだろうか。さらに「物語を語る」という行為そのものの考える視点として、ティム・エッチェルス率いるフォースド・エンタテインメントの作品を紹介する。そもそも「物語を語る」とはどういうことか？ 誰がその物語を語る権利があるのか？ 物語を語ることの可能性と不可能性が、脱臼と脱線のユーモラスなパフォーマンスから浮かび上がってくるだろう。

私たちが生きる都市にも、物語を生成する潜在力が蓄積されているはずだ。ドキュメンタリー演劇の先駆者リミニ・プロトコルは今回、東京23区の統計データから抽出された100名の一般市民を舞台に上げ、東京という都市に生きる人々の生態やメンタリティを巧妙にトレースし可視化する。また、これまでも社会と演劇を切り結ぶ独自のOS

を発明し続けてきたPort Bの高山明は、アジア諸地域から様々な理由で東京に移り住んでいる移民や留学生達のコミュニティを巡り、そこで語られる物語／歴史に耳を澄ます旅を観客と共に作り上げる。これらの演劇的仕掛けを通じて、私たちが生きる都市「トーキョー」に堆積する膨大な個人の物語と集団の無意識が浮かび上がってくるに違いない。アジアからの移住者が増え続ける一方、特定のアジアコミュニティに対する明らかな差別や排斥も散見される今日の日本で、「内なる他者」としてのアジアをもう一度、歴史と未来の接点から捉え直す作業は緊急の課題でもあるだろう。

今回で4回目を迎える公募プログラムにおいても、この課題と向き合いつつ、引き続きアジアにおける創造と批評のプラットフォームとしての機能を高めていきたい。アジア各地から若い才能が東京に集い、未知の観客や批評と出会うこと。そこから対話が生まれ、相互に差異を認識し合うことで、あらたな創造のダイナミズムをアジアへと還元すること。そのようなビジョンのもとに実施される公募プログラムでは、今回アジアから集まる9組のアーティストや批評家、観客との対話はもちろん、アジアのフェスティバルや劇場といったイニシアティブとのパートナーシップを強化し、アジアにおけるクリエイションと批評の質の向上を目指していく。

また今回から、あらたに「F/Tオープン・プログラム」を立ち上げる。これは文字どおり「フェスティバルを開いていく」ために、地域にある既存のイニシアティブやネットワーク、様々な文化的・商業的な資源との連携のもと、より多様な人がフェスティバルを楽しみ、参加する企画を集中的に展開する取り組みである。F/Tの開幕を告げるF/T13オープニング・イベントや、地域コミュニティも巻き込んだF/Tモブ・スペシャル、さらに今回のメインビジュアルにも起用したイラストレーター岡村優太によるイメージが池袋の街にあふれるフラッグプロジェクトなどによって、F/Tはさらに都市に浸透し、都市を覚醒させ、都市と戯れることになるだろう。

う。また美術家の椿昇が考案する巨大オブジェがフェスティバルのシンボルとして出現、F/Tで上演される様々な物語との化学反応を引き起こしながら、フェスティバルという場自体を盛り上げていくことになる。

これらの試みを通じて、今回のF/Tでは、これまでの5年間の蓄積の上にさらなるミッションの再定義を行いたいと考えている。現在、「新しい価値を創造・発信するフェスティバル」「多様な人々の出会いと対話の場としてのフェスティバル」「アジアにおけるプラットフォームとしてのフェスティバル」という3つのミッションのもとに設計されているF/Tは、基本的にクリエイション型のフェスティバルであり、アーティストとの持続的な信頼関係に基づく作品の創作・発表を基礎としている。このようなF/Tの根本理念について、またそこから派生する実践について、よりオープンに議論するシンポジウムを開催する。そこでは改めて、フェスティバルが立脚する公共文化政策の根本理念とそれが担保すべき表現の自由と責任について、歴史と世界を参照しながら捉え直すことになるだろう。こうした開かれた議論を経て、このフェスティバルが未来へと継続されるあらたな物語／歴史を、そこに集うすべての人々と共に紡ぎ始めることができたらと願っている。



© Nobuyuki Kagamida

相馬千秋 Chiaki Soma ▶1975年生まれ。早稲田大学第一文学部卒業後、フランス・リヨン第二大学・大学院で文化政策およびアーツマネジメントを専攻。2002年よりNPO 法人アートネットワーク・ジャパン所属。主な活動に東京国際芸術祭「中東シリーズ04-07」、横浜の芸術創造拠点「急な坂スタジオ」設立およびディレクション(06-10年)など。2009年F/T創設から現在に至るまで、F/T全企画のディレクションを行っている。2012年度より文化庁文化審議会文化政策部会委員。

F/T13

フェスティバル/トーキョー

メインビジュアル

F/T13のメインビジュアルは、イラストレーター岡村優太を起用。
池袋の街並みをモチーフに描き下ろされたイラストを中心に展開する。
アートディレクション & デザイン：ASYL



© Yuta Okamura

岡村優太 Yuta Okamura ▶1988年生まれ、大阪府茨木市出身、京都市在住。2011年京都精華大学卒業。卒業後、イラストレーターとしての活動を開始。面相筆と墨をもちいたドローイングを手がける。雑誌やフライヤーなど紙媒体のみならず、アートプロジェクト「瀬戸内国際芸術祭2013 小豆島 醤の郷十坂手港プロジェクト」やミュージックビデオ「Scott & Rivers - Butterfly」などさまざまな媒体で展開。そのほか雑誌「Mograg vol.4」やグループ展「MY BEST FOOD」(ROCKET/2013)に参加するなど、精力的に活動を続ける。

フェスティバル/トーキョー 13のプログラムは、オープン・プログラム、主催プログラム、公募プログラム、連携プログラムの4つの事業で構成されています。

フェスティバルならではの
祝祭と出会いを生み出す

オープン・プログラム

誰もが気軽に無料で楽しめるオープニング・イベントや巨大オブジェの出現、街中へ広がっていく参加型プログラム「F/T モブ・スペシャル」などにより、多様な人々が出会い、対話する場を生み出します。

F/Tならではの
新しい価値を創造・発信する

主催プログラム

F/T13では、演劇の基本要素であるドラマやフィクションを問い直し、同時代の物語の新しいあり方を探求します。古今東西の古典戯曲や神話などを今日的な文脈で捉え直す作品や、社会状況の変化に対応した新たな語りの形式を探求する作品を多数製作・上演します。

アジアの若いアーティストを
サポートし、紹介する

公募プログラム

作品の上演を通じ、彼らが世界に羽ばたく機会を提供することで、アジアにおける舞台芸術のプラットフォーム機能を果たしています。また新しい価値を創造する優秀な作品・アーティストにはF/Tアワードを授与し、次年度以降も主催プログラムを通じ継続的な支援を行います。

東京の演劇シーンを
世界に紹介する

連携プログラム

F/Tと同時期に都内で開催される多様な作品を世界に紹介することで、「東京の演劇シーン」の活性化を図ります。

F/T13

F/T13

フェスティバル/トーキョー

主催プログラム

F/T ならではの新しい価値を創造・発信する

オーバードーズ：サイコ・カタストロフィー

シアタースタジオ・インドネシア

演出：ナンダン・アラデア [インドネシア]

インドネシア

演劇(野外)

世界初演

11月9日(土)～11月13日(水)

計4ステージ

池袋西口公園

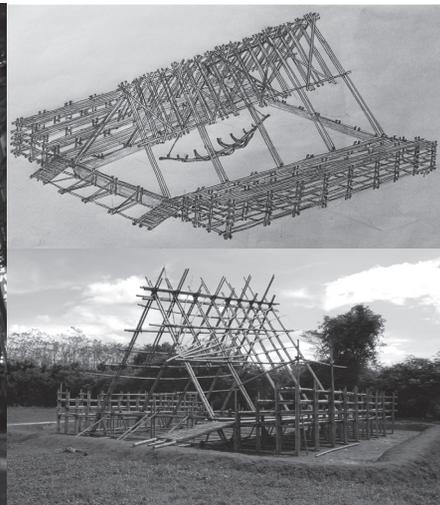
一般前売：¥3,500(当日+¥500)

自由席(整理番号付)

上演時間：60分(予定)



「バラバラな生体のバイオナレーション! ～エマージェンシー」
(F/T12公募プログラム)



上：竹の劇場イメージスケッチ
下：竹の劇場試作

/見どころ

- 1 昨年のF/Tアワード(公募プログラム最優秀賞)受賞カンパニーが、主催プログラムに初登場、F/T13のオープニングを飾る!
- 2 「海」「船」をイメージした、竹製の野外劇場が池袋西口公園に出現! 場内を縦横無尽に駆けるパフォーマンスが、客席をも揺らす!
- 3 客席の反応を逐次映像に変換して舞台面に投射。インタラクティブな空間づくりを通して、自然と人間の身体との関係を再検証する

竹を使った巨大な建造物の製作を通じて、自然と人間、技術との関係に切り込んだパフォーマンス『バラバラな生体のバイオナレーション! ～エマージェンシー』で、昨年のF/Tアワード(*)を受賞した、シアタースタジオ・インドネシア。主催プログラム初登場となる今回は、「海」や「船」をイメージした竹製の野外劇場を池袋西口公園に設置、1883年のクラカタウ山の大噴火と津波災害を題材にした新作を上演する。場内を自在に駆けるエネルギー溢るパフォーマンスは、客席をも揺らし、自然との格闘を体感させる。また、観客の反応を逐次映像に変換する装置も導入、舞台面には常にその映像がプロジェクションされる。畏れや祈りの感情をも引き出すこの劇場空間は、人間本来の生き方、身体のある方を再考する場ともなるはずだ。

*F/Tアワード……F/T公募プログラムの参加作品を対象に、新しい価値を創造する作品(アーティスト)を選出、次年度の主催プログラムとしての創作・発表の権利を約束する。

/ 劇評・レビュー

未開社会における創造の手続き（プリコラージュ）を野外演劇として繰り広げながら、超近代の科学技術の制御不可能性と戦うという身体的な実践を果敢にも展開しつづけるのである。あきらめない、それがこのパフォーマンスの思想的根拠でもあるのだ。だから、巨大な構築体に脅かされつつも、しかし、それを切り抜けようとする身振りが考案されつづけるのである。うまくいくかどうか、それはわからないが、いまのところ、彼ら、彼女たちはうまく切り抜けている。その時間の流れが、このパフォーマンスの持続時間であり、緊急事態はバイオナレーションによってかろうじて切り抜かれているのである。そのことが、おそらくは、インドネシアにおいても、近代性の展開過程のなかで人間が試みつづけなければならないことなのであろう。そして、そのことを実践するモデル、もしくはヴィジョンを提示するものとしてこの舞台は構想されているにちがいないのである。

鴻英良、2012年F/T公募プログラム選評

『小さな身振りか大きな身振りか？—身振りの思想性、その演劇との関係をめぐって—』より抜粋

/ プロフィール



ナンダン・アラデア Nandang Aradea ▶1971年、インドネシア西ジャワ州生まれ。インドネシアの教員養成学校を卒業後、モスクワの芸術大学で演出を学ぶ。2006年にシアタースタジオ・インドネシアを設立し、バンテン州を拠点に活動。09年にFederasi Teater Indonesiaで最優秀賞を受賞。10年、ポーランドのFETAに参加。インドネシア国内では、バンテン州知事賞を受賞。11年、ジャカルタビエンナーレに参加。12年、F/T公募プログラムに参加し『バラバラな生体のバイオナレーション！ ～エマージェンシー』でF/Tアワードを受賞。

/ 過去作品

- ▶ Perahu [船] (2006)
- ▶ Bicaralah Tanah [土地の話] (2007-2011)
- ▶ Perempuan Gerabah [陶器の女] (2008-2010)
- ▶ Bebegig [案山子] (2010)
- ▶ Bionarasi Tubuh Terbelah [バラバラな生体のバイオナレーション!] (2011)

/ クレジット

演出：ナンダン・アラデア
 舞台美術・出演：オトン・ドゥラヒム
 音響デザイン・映像オペレーター：エンリー・ジョハン・ジャオハリ
 出演：デシ・インドリアニ、マブスティ、ウセップ・メン・スヘンダール、アデ・イイ・サリフディン、オマン・アブドゥラフマン
 照明：オマン・アブドゥラフマン
 舞台監督：ディンディン・サプルディン
 ユニットオフィサー：ファリッド・イブヌ・ワヒド
 ユニットプロダクション：ルディ・ルスタンディ

広報：ラトゥ・セルフィ・アグネシア、イスバトゥラ
 制作統括・出演：ハサスディン・バグス・バゲニ
 プロデューサー：セノ・ジョコ・スヨノ、アグス・ファイサル・カリム
 アドバイザー：ラノ・カルノ（バンテン州副知事）、H.マルワン
 顧問：ジャトニカ・ナンガミハルジャ
 後援：インドネシア共和国大使館
 製作：フェスティバルトーキョー、シアタースタジオ・インドネシア
 主催：フェスティバルトーキョー

『四谷雑談集』 + 『四家の怪談』

中野成樹、長島 確 [日本]

日本

演劇(ツアー形式)

世界初演

『四谷雑談集』

11月9日(土)、14日(木)、17日(日)
19日(火)、23日(土・祝) 計5ステージ
四谷~新宿エリア

上演時間: 90分(予定)

『四家の怪談』

11月10日(日)、15日(金)、16日(土)
20日(水)、24日(日) 計5ステージ
足立・葛飾エリア

上演時間: 120分(予定)

※料金、スケジュール等の詳細は、決定次第F/Tウェブサイトにて発表。



© Kazue Kawase

/見どころ

- 1 海外戯曲上演のツボを知り尽くした
中野成樹と長島確(中野成樹+フランケンズ)が、
日本の怪談の代名詞「四谷怪談」に初挑戦!
- 2 街に出て、読んで、歩いて、
想像する2つの演劇体験
- 3 写真、イラスト、建築など、
さまざまなジャンルの専門家が参加する
創作集団「つくりかたファンク・バンド」を
結成、「四谷怪談」の魅力を
多層的に描き出す

自ら「誤意識」と称する、大胆かつツボを押さえた海外戯曲の演出で、小劇場界に新風を吹き込んだ名コンビ、演出家・中野成樹とドラマトゥルクの長島確(中野成樹+フランケンズ)が、日本の怪談の代名詞「四谷怪談」に初挑戦。鶴屋南北『東海道四谷怪談』の元ネタとされる本をもとに、その舞台となった四谷~新宿エリアを巡るガイドツアー『四谷雑談集』、その現代版を足立・葛飾エリアで展開する新作民話『四家の怪談』の2本を上演する。写真、イラスト、建築などさまざまなジャンルの専門家が集う「つくりかたファンク・バンド」を新たに結成、集団創作を経て生み出される2作は、多層的なドラマ体験をもたらしてくれるだろう。

/プロフィール



中野成樹 Shigeki Nakano ▶ 1973年生まれ。演出家。中野成樹+フランケンズ主宰。有明教育芸術短期大学講師。主に海外古典戯曲をとりあげ、誤意識(誤訳+意訳)なる独自の手法で、イメージの凝り固まりつつある過去の名作を今に仕立て直す。本作では多様なメンバーとともに、つくりかたファンク・バンドとして臨む。



長島 確 Kaku Nagashima ▶ 1969年生まれ。日本におけるドラマトゥルクの草分けとして、コンセプトの立案から上演テキストの編集・翻訳・構成まで、身体や声とともにあることばを幅広く扱う。近年は『墨田区/豊島区/三宅島在住アトレウス家』『長島確のつくりかた研究所』(東京アートポイント計画)など劇場外でのアートプロジェクトも主導。

/クレジット

作: つくりかたファンク・バンド
メンバー: 中野成樹(演出)、長島 確(ドラマトゥルク)、青木 正(デザイン)、
小澤英実(文筆)、大谷能生(音楽・批評)、かつしかけいた(イラスト)、
川瀬一絵(写真)、佐藤慎也(建築)、須藤崇規(映像・Web)ほか

制作: 加藤弓奈
製作・主催: フェスティバル/トーキョー

東海道四谷怪談 —通し上演—

日本

演劇

木ノ下歌舞伎

監修・補綴：木ノ下裕一 [日本]

演出：杉原邦生 [日本]

作：鶴屋南北

11月21日(木)～11月24日(日)

計4ステージ

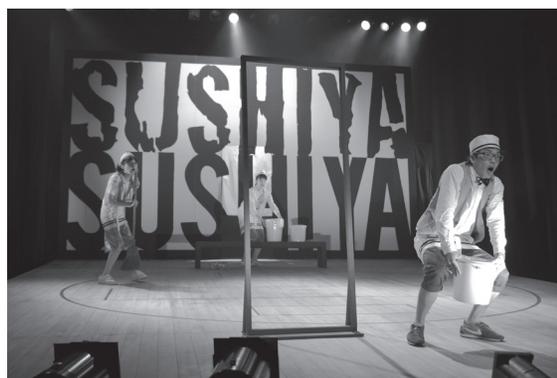
あうるすぽっと

一般前売：¥3,500(当日+¥500)、

幕見券：¥1,500(前売・当日)

※幕見券は11月1日発売予定

指定席 / 上演時間：6時間(休憩含む・全3幕)(予定)



京都×横浜プロジェクト2012「義経千本桜」より「鮎屋」の場面
2012年7月京都芸術劇場 春秋座
© Toshihiro Shimizu

見どころ

- 1 古典芸能への深い造詣と
現代的で自由な発想で、歌舞伎演目に
新たな息吹を与える若手企画集団、F/T初登場
- 2 鶴屋南北の大作『東海道四谷怪談』の
全幕通し上演を敢行！
総勢20名の俳優陣による「一大群像劇」が、
お岩の悲劇を生んだ社会、時代の闇を描き出す
- 3 元・天井棧敷の女優・蘭妖子、
舞台美術家・島次郎ら、現代の小劇場演劇
の枠を超えた共同作業も実現！

劇場に響き渡るテクノが祝祭性を強調する『三番叟』、3人の若手演出家による『義経千本桜』通し上演など、主宰・木ノ下裕一の古典芸能への深い造詣をベースに、現代における歌舞伎演目上演の可能性を探る木ノ下歌舞伎。京都、横浜を拠点に活動する彼らが、この秋F/Tに初登場する。同団体の企画員でもある演出家・杉原邦生が、総勢20名の俳優陣と共に挑むのは、鶴屋南北の大作『東海道四谷怪談』。現在ではカットされることの多い端役のエピソードにも光を当てた「一大群像劇」を通じ、お岩の悲劇を生み出した時代、社会の闇に迫る。さらに今回は、元・天井棧敷の女優・蘭妖子、舞台美術家・島次郎ら、ベテラン演劇人も参加、小劇場演劇の枠を超えた同時代演劇の誕生が待たれる。

プロフィール



© Ayumu Matsuura

木ノ下裕一 Yuichi Kinoshita ▶1985年和歌山市生まれ。小学校3年生の時、上方落語を聞き衝撃を受けると同時にその日から独学で落語を始め、その後、古典芸能への関心を広げつつ現代の舞台芸術を学び、古典演目上演の演出や監修を自らが行う木ノ下歌舞伎を旗揚げ。2010年度から3カ年継続プロジェクトとして「京都×横浜プロジェクト」を実施し12年7月には『義経千本桜』の通し上演を成功させるなど、意欲的に活動を展開している。F/Tには演劇大学09秋に参加。



© Takashi Horikawa

杉原邦生 Kunio Sugihara ▶1982年東京生まれ、神奈川県茅ヶ崎育ち。特定の団体に縛られず、さまざまなユニット、プロジェクトでの演出活動を行っている。木ノ下歌舞伎には2006年、『yotsuya-kaidan』での演出をきっかけに企画にも参加。これまでに『三番叟』(08年)、『勸進帳』(10年)、『義経千本桜』(12年)、『黒塚』(13年)と合わせて5作品を演出。F/Tには11年公募プログラムに参加。

クレジット

監修・補綴：木ノ下裕一
演出：杉原邦生
作：鶴屋南北

出演：亀島一徳、黒岩三佳、飯塚克之、細野今日子、田中佑弥、高橋義和、都京助、田中美希恵、森田真和、日高啓介、後藤剛範、四宮章吾 / 乗田夏子、高山のえみ、峯岸のり子、岩谷優志、木山廉彬、竹居正武、森一生 / 蘭妖子

美術：島次郎
照明：中山奈美
音響：齋藤学
衣装：藤谷香子

舞台監督：大鹿展明
補綴助手：福垣貴俊
文芸：関亜弓
制作：本郷麻衣

助成：芸術文化振興基金
協力：オフィス・ラン、急な坂スタジオ、krei inc.、KUNIO、劇団しようよ、劇団野の上、劇団民藝、ZACCO、中野成樹+フランケンズ、ハイレグタワ、FAIFAI (快快)、FUKAIPRODUCE羽衣、ロク

製作：木ノ下歌舞伎
共同製作：フェスティバルトーキョー
主催：フェスティバルトーキョー 木ノ下歌舞伎



芸術文化振興基金

東京ヘテロトピア

Port B

構成・演出：高山 明 [日本]

11月9日(土)～12月8日(日)

都内各所

一般前売：¥3,500(当日+¥500)

※都内各所に点在する会場を自由に巡る形式の作品です。
※ご購入のチケットは、東京芸術劇場内インフォメーションにて
ガイドブックと携帯ラジオにお引替ください。

お引替え期間：11月9日(土)～12月8日(日)
(休館日：11月11日(月)・12日(火)は除く)

※お引替え後は会期中、何度でも自由に会場を訪れることができます。

日本

演劇(ツアー形式)

世界初演



© Masahiro Hasunuma

/見どころ

- 1 ヨーロッパ屈指の演劇祭「ウィーン芸術週間」で、3.11後の現実に応答する二つの近作を上演、話題を集めたPort B(高山明)の最新作
- 2 アジアからの留学生たちの痕跡を歩き、聞き、「もう一つの東京」を思い描くツアー演劇
- 3 「旅」「翻訳」をめぐる創作過程での思索も「ラジオ番組」等を通じて作品の外へ発信

3.11後の現実に向き合った近作『Referendum - 国民投票プロジェクト』(F/T11)、『光のないII』(F/T12)が、ウィーン芸術週間でも上演され、話題を集めたPort B。その最新作は、アジアからの留学生たちの痕跡を歩く「旅」の演劇だ。参加者はガイドブックと携帯ラジオを手に、レストランや公園などさまざまな公共空間を思い思いに訪れる。目的の場所でラジオから聞こえてくるのは、かつてその場所に生きた人や縁のある都市、国の物語。そして観客は未知のアジア、そして「現実の中の異郷=ヘテロトピア」としての東京に出会っていく。創作上のキーワードは「旅」と「翻訳」。物語(テキスト)は現役の留学生と管啓次郎、林立騎ら翻訳者との対話を元に生み出され、その思索の過程もオリジナルの「ラジオ番組」等を通じ、広く発信される。

/プロフィール



© Yasuyuki Emori

高山 明 Akira Takayama ▶1969年生まれ。2002年、Port Bを結成。既存の演劇の枠組を超えた社会実験的な作品を次々と発表。都市や社会に存在する記憶や風景、メディアなどを引用し再構成しながら作品化する手法で、国内外のフェスティバルや美術展で注目を集めている。『個室都市 東京』(F/T09秋)はウィーン芸術週間(11年)に招聘され、13年にも同芸術祭でウィーン版『Referendum - 国民投票プロジェクト』(F/T11)、『光のないII』(F/T12)を発表し、いずれも高い評価を得た。

/クレジット

構成・演出：高山 明
テキスト監修：管 啓次郎
リサーチ&テキスト：小野正嗣、温 又柔、林 立騎、南 映子ほか、
アジアからの留学生たち
ガイドブック編集：深澤晃平
技術：井上達夫

ラジオ協力：毛原大樹
記録写真：蓮沼昌宏
制作：田中沙季
協力：東京芸術大学・桂英史研究室、柿本ケンサク、高橋聡、望月章宏
製作：フェスティバル/トーキョー、Port B
主催：フェスティバル/トーキョー

永い遠足

サンプル

作・演出：松井 周 [日本]

日本

演劇

世界初演

11月17日(日)～11月25日(月)

計10ステージ

にしすがも創造舎

一般前売：¥3,500(当日+¥500)

自由席(整理番号付)

上演時間：100分(予定)

日本語上演、英語字幕つき(11月23日(土)、24日(日)のみ)



『女王の器』© Tsukasa Aoki

/見どころ

- 1 「アブノーマル」を捕捉する
鋭敏な感性を武器に人間の生態を描き出す個性派、松井周が
3年ぶりにF/Tで新作を上演!
- 2 器としての「私」の身体との
付き合い方は——。
生命の起源から、
高度先進医療までを視野に入れた、
サンプル流の「生き物／人間」観察記
- 3 ギリシャ悲劇「オイディプス王」を
参照しつつ、人間のあり方、
個人と社会の関係を、根源から検証し
アップデートを試みる

アパートの一室で「国家建設」を進める中年の男とその母親の共依存的な関係を描く『自慢の息子』で、第55回岸田國士戯曲賞を受賞したサンプルの松井周。国家や社会を覆う「大きな物語」から、個人の営みに立脚した「小さな物語」まで。人々の「物語」づくりへの欲望とそこで起こる葛藤をつぶさに観察してきた彼が、人類の起源と現代を生きる命をテーマにした新作を発表する。参照されるのは、親殺しや近親相姦といったタブーを通じて、個人と社会の関係を描き出したギリシャ悲劇「オイディプス王」。戯曲と俳優、美術や照明とが有機的に絡み合う独自の劇空間の中で、先進医療と生命倫理の問題をも視野に入れた、人間の出自をめぐる新たな「物語」が紡がれる。

/プロフィール



© Mika Iwamura

松井 周 Shu Matsui ▶1972年東京生まれ。96年に劇団「青年団」に俳優として入団。その後、作家・演出家としても活動を開始、2007年に劇団「サンプル」を旗揚げ、青年団から独立する。『自慢の息子』(10年)で第55回岸田國士戯曲賞を受賞。劇団としての活動の傍ら、文学座+青年団自主企画交流シリーズ第一弾『地下室』(06年/作：松井周)、第二弾『パイドラの愛』(08年/作：サラ・ケイン)、さいたまゴールド・シアター『聖地』(10年/演出：蜷川幸雄)などの外部への脚本提供や海外戯曲の演出も行う。F/Tには、09秋『あの人の世界』で参加。

/クレジット

作・演出：松井 周
出演：古屋隆太、奥田洋平(以上サンプル・青年団)、
野津あおい(サンプル)、羽場睦子、稲継美保、
坂口辰平(ハイバイ)、坂倉奈津子、久保井 研(唐組)

舞台監督：鈴木康郎、浦本佳亮、谷澤拓巳
舞台美術：杉山至+鴉屋
照明：木藤 歩
音響：牛川紀政
衣裳：小松陽佳留(une chrysantheme)
英語字幕：門田美和

演出助手：山内 晶
ドラマターグ：野村政之
WEBデザイン：斎藤 拓
宣伝写真：momoko matsumoto
フライヤーデザイン：京(kyo.designworks)
制作：三好佐智子(quinada)、雷永直子(quinada)
助成：公益財団法人セゾン文化財団
協力：レトル、青年団、ハイバイ、唐組、至福団、シバイエンジン
製作：サンプル・quinada
共同製作・主催：フェスティバルトーキョー

ラビア・ムルエ連続上演

33rpmと数秒間



© Rabih Mroué

一般前売：¥2,500 (当日+¥500)
 自由席 (整理番号付) / 上演時間：60分 (予定)
 英語上演、日本語字幕つき

雲に乗って



一般前売：¥2,500 (当日+¥500)
 自由席 (整理番号付) / 上演時間：65分 (予定)
 アラビア語上演、日本語字幕つき

ピクセル化された革命



入場無料・要WEB予約
 自由席 / 上映時間：22分
 英語上映、日本語字幕つき

作・演出：リナ・サーネー、
 ラビア・ムルエ [レバノン]

レバノン

演劇

日本初演

11月14日 (木) ~ 11月15日 (金)

計3ステージ

東京芸術劇場 シアターイースト

舞台は自殺した革命家・アーティストの部屋。出演者はいない。ログインしたままの Facebook の画面は更新を続け、携帯電話には次々と SMS が届く。当事者はもちろん、互いの肉体も不在なまま続けられるコミュニケーションの応酬に、着地点のないアラブの「いま」が浮かび上がる。

作・演出：ラビア・ムルエ
 共同演出：サルマド・ルイス
 [レバノン]

レバノン

演劇

日本初演

11月16日 (土) ~ 11月17日 (日)

計2ステージ

東京芸術劇場 シアターイースト

レバノン内戦で銃撃を受けたラビア・ムルエの実弟、イエッサ。後遺症により現実とフィクションの境を認識できなくなった彼が、子供時代、家族や友達のこと……断片的な記憶をたぐり寄せ、「舞台」という虚構の場で自らの半生を語る。それは個人の物語であると同時に、歴史の渦の中で生きる「人間」の物語でもある。

監督：ラビア・ムルエ
 [レバノン]

レバノン

映像

日本初上映

無料

11月14日 (木) ~ 11月17日 (日)

計10回上映

東京芸術劇場 アトリエイースト

シリア内戦中、YouTube に数多く投稿された「ダブル・シューティング」の映像。携帯電話のカメラが捉えた銃口が撮影者を撃つ、その一瞬に何が起こっていたのだろうか——。デジタル映像を解析しながら進められるレクチャーが、切り取られたイメージと現実との間の差異、ピクセル化されたスナイパーの実体、画面には映らない撮影者の死の瞬間に迫る。

アラブ世界のリアルな現状と、マスメディアやアートにおける表現の差異に着目した作品で知られるレバノン出身の鬼才、ラビア・ムルエ。世界最大規模の美術展「ドクメンタ」にも参加するなど、現代美術の文脈でも高く評価される彼の作品を3作連続で上演する。同じくレバノン出身のパートナー、リナ・サーネーとの共作『33rpmと数秒間』と、ドクメンタで発表された映像作品『ピクセル化された革命』は、いずれも俳優の登場しない作品。前者は、ある革命家・アーティストの自殺の後も続くSNSや携帯電話などのメディアを通じたコミュニケーションを無人の舞台上に描き出すもの、

後者はラビア・ムルエ自身がナビゲーターとなってシリア内戦中にネット上に投稿された「ダブルシューティング」の映像を解析しながら、スナイパーとその撮影者（被害者）の実体、銃撃の瞬間に迫るレクチャー形式の映像作品だ。また『雲に乗って』では、銃撃の後遺症で虚構と現実の境を認識できなくなったラビアの実弟・イエッサが自らの半生を語る。これらの作品で触れられた虚構と現実の重なりとズレは、「アラブの春」を経てもなお不安定に行方なく揺れ、実体を掴みきれない彼の地の状況をも浮き彫りにする。

／レコメンド

『33rpm と数秒間』

——タイトルを見て難しそうな作品ではないかと敬遠したくなる気分は分らなくはない。だが、一度本作を見始めたなら、あつというまにその世界に誰でも惹きこまれてしまうはずだ。たとえ生身の俳優が一人も登場しなくても「演劇」は成立する？——その通りだが、それではあまりに評価として消極的すぎる。むしろこう言ってみよう。人々はそこに「演劇」がまさに目の前で思考し、かつ進化しつつある姿を目の当たりにするのだ、と。そして〈進化〉するその姿の向こう側に、レバノンの〈現実〉の手触りばかりでなく、グローバル時代を生きる私たち自身の自画像をも発見するだろう。

森山直人（日本、演劇批評家）

『ピクセル化された革命』

かつてラース・フォン・トリアー監督らにより掲げられたドグマ 95 運動のマニフェストを、演出家ラビア・ムルエはその独創的発想により、シリア騒乱におけるアマチュア・ジャーナリズム映像に適應してみせる。そして、その審美性について恐ろしく才智にたけた分析を施す。この 22 分間のレクチャー・パフォーマンスの画面に挿入されるのは、無数の「ダブル・シューティング」の瞬間。ダマスカスで日常的に勃発する二重のシュート（携帯電話による撮影／マシンガンによる射殺）の一瞬が、電子空間に記録される。だが逆説的に、その映像には観客（撮影者）と俳優（殺人者）がつねに不在だ。死者の携帯画面には、オプトグラフィーのような角膜残像は記録されない。また殺人者の相貌はフォーカスするほど無数の抽象的なピクセルと化す。死は、生は、暴力は、シリアのどこに存在するのだろうか。

岩城京子（日本、パフォーマンス・アーティスト・ジャーナリスト）

／劇評・レビュー

『33rpm と数秒間』

虚構か現実か？ パフォーマンスなのか、インスタレーションなのか、演劇なのか？ 『33rpm と数秒間』は、政治やメディア社会に鋭い問いを投げかける。驚くべき、またとても興味深い作品である。いわゆる演劇好きだけでなく、幅広い人に薦めたい。 Laura Plas, Les Trois Coups.com（フランス／演劇ジャーナル）

『雲に乗って』

『雲に乗って』は、情感に訴える感動的な作品であるとともに、知的な感性に満たされた完成度の高い演劇である。その物語は、極々個人的なものでありながら、非常に普遍的なものを描くことに成功している。

Jim Quilty, The Daily Star（レバノン／新聞）

/上演履歴

『33rpmと数秒間』

- ▶2012年5月 クンステン・フェスティバル (ブリュッセル、ベルギー)
- 6月 フェスティバル・デラ・コリーネ・トリネーゼ (トリノ、イタリア)
- 7月 マルタ・フェスティバル (ポズナン、ポーランド)
- 7月 アヴィニョン演劇祭 (アヴィニョン、フランス) ほか

『雲に乗って』

- ▶2013年3月 ロッテルダム市立劇場 (ロッテルダム、オランダ) ほかオランダ各都市巡演
- 5月 ホーム・ワークス6 (バイルート、レバノン)

『ピクセル化された革命』

- ▶2012年5月 ドキュメンタリー・フォーラム (ベルリン、ドイツ)
- 6月 ドクメンタ13 (カーセル、ドイツ) ほか世界各地巡演
- ▶2013年5月 ホーム・ワークス6 (バイルート、レバノン)

/プロフィール



ラビア・ムルエ Rabih Mroué ▶1967年、レバノン出身、バイルート在住。俳優、演出家、脚本家、またレバノンの季刊誌『Kalamon』や『TDR:The Drama Review』(ニューヨーク)の編集者として活動している。バイルート・アート・センター協会の設立者であり、理事を務める。現在、ベルリン自由大学、国立リサーチセンター「インターウェービング・パフォーマンス・カルチャーズ」フェロー。2010年、スポルディング・グレイ賞受賞。11年、プリンス・クラウス賞受賞。F/Tには、F/T09秋『フォト・ロマンス』で参加。



リナ・サーネー Lina Saneh ▶1966年、レバノン出身。女優、演出家、脚本家として活動する。Ashkal Alwan-Home Workspaceのカリキュラム委員会のメンバーである。2008-13年、国立ジュネーヴ・デザイン大学教授。現在、ベルリン自由大学、国立リサーチセンター「インターウェービング・パフォーマンス・カルチャーズ」フェロー。主な作品は、『リナ・サーネーボディ・パーツ・スタジオ』(07-09年、ウェブ・プロジェクト)、『誰かが言い続けなければならない』(08年、ビデオ・インスタレーション)、『フォト・ロマンス』(09年、F/T09秋主催プログラム)、『33rpmと数秒間』(12年)など。

/クレジット

『33rpmと数秒間』

作・演出：リナ・サーネー、ラビア・ムルエ
 舞台デザイン、グラフィック、アニメーション：サマル・マカロン
 技術ディレクション：サルマド・ルイス、トーマス・カッペル
 フォト・ディレクション：サルマド・ルイス
 演出補佐：ポール・カーダ
 制作：ベトラ・セルハール

『雲に乗って』

作・演出：ラビア・ムルエ
 協同演出：サルマド・ルイス
 出演：イエッサ・ムルエ
 制作補佐：ベトラ・セルハール

『ピクセル化された革命』

監督、出演：ラビア・ムルエ

主催：フェスティバルトーキョー

日本

演劇

現在地

チェルフィッチュ

作・演出：岡田利規 [日本]

11月28日(木)～12月8日(日)

計13ステージ

東京芸術劇場 シアターイースト

一般前売：¥4,000(当日+¥500)

自由席(整理番号付)

上演時間：100分

日本語上演、英語字幕つき



© Tsukasa Aoki

/見どころ

- 1 現代日本の若者の生活を巧みに切り取り、国内外で高い評価を得てきたチェルフィッチュ・岡田利規の3.11後の第一作を東京初上演!
- 2 SF的な設定、書き言葉を使った台詞など、虚構性の高い表現に挑戦、不吉な噂をめぐり逡巡する7人の女性たちの心模様を映し出す
- 3 テキスト、身体から音楽や美術、照明まで。繊細な変化を捉え、表現し続ける舞台空間

現代日本の若者の心理を、鋭敏かつ繊細な言語、身体感覚を持って切り取ってきたチェルフィッチュの岡田利規。昨年はドイツの劇場・HAUの企画で、廃墟となった原子力発電所を描くガイドツアー形式の作品を発表するなど、国際的にも注目を集める岡田の、3.11後の第一作となった作品を東京初上演する。ある日突然出現した青い雲をめぐる噂がはじまった不吉な噂。信じるか信じないか、逃げるのか留まるのか、あるいは……。変化を前に逡巡する7人の女性たちの心模様は、不穏な空気を細やかに表現する音楽や照明とも相まって、私たちの生きる現実を改めて振り返らせる。SF的な設定、女性のみ出演者、書き言葉を使った台詞など、チェルフィッチュの新境地ともなった本作。初演から1年半の時を経た「現在地」は、私たちの「現在」にどのように響くだろう。

/プロフィール



岡田利規 Toshiki Okada ▶1973年 横浜生まれ。演劇作家、小説家、チェルフィッチュ主宰。活動は従来の演劇の概念を覆すとみなされ国内外で注目される。2005年『三月の5日間』で第49回岸田國士戯曲賞を受賞。07年デビュー小説集『わたしたちに許された特別な時間の終わり』を新潮社より発表し、第2回大江健三郎賞を受賞。13年には「遡行 変形していくための演劇論」を河出書房新社より刊行。

/上演履歴

『現在地』

- ▶2012年 4月 KAAT神奈川芸術劇場(横浜)
- 5月 イムズホール/福岡演劇フェスティバル(福岡)
- 7月 Baltoscandal2012(ラクヴェレ/エストニア)
- 10月 Kampnagel(ハンブルグ/ドイツ)
- 10月 PACT Zollverein(エッセン/ドイツ)
- ▶2013年 3月 Doosan Art Center(ソウル/韓国)

/クレジット

作・演出：岡田利規
 出演：佐々木幸子、伊東沙保、南波 圭、安藤真理、青柳いづみ、
 上村 梓、石橋志保
 美術：二村周作
 音楽：サンガツ
 舞台監督：鈴木康郎
 音響：牛川紀政
 照明：大平智己

映像：山田晋平
 宣伝美術：松本弦人
 制作：precog
 共同製作：Doosan Art Center
 協力：急な坂スタジオ

製作：KAAT
 主催：フェスティバルトーキョー

F/T13イエリネク連続上演

日本

美術

演劇

日本初演

新作

光のない。(プロローグ?)

作：エルフリーデ・イエリネク [オーストリア]

演出・美術：小沢 剛 [日本]

11月21日(木)～11月24日(日)

東京芸術劇場 シアターイースト

※料金、上演時間等の詳細は、決定次第F/Tウェブサイトにて発表。



『帰って来たDr.N』 © The Japan Foundation / photo: Keizo Kioku

/見どころ

- 1 ノーベル賞作家エルフリーデ・イエリネクが3.11後の現実への応答として書いた『光のない。』シリーズの最新作を、昨年に続き上演!
- 2 現代美術家・小沢剛による、さまざまなメディア、視点を通してイエリネクを観る「展覧会」
- 3 客席、舞台から、バックステージまで。美術家が構成する「劇場」体験が、イエリネクの投げかける「演劇」への問いに呼応する。

昨年のF/Tでも相次いで上演され、3.11後の世界に向き合う問題作として、大きな反響を呼んだ、エルフリーデ・イエリネクの『光のない。』シリーズ。その最新作『光のない。(プロローグ?)』の演出に、高い問題意識をキャッチーな手つきで料理する現代美術家の小沢剛が挑む。イエリネクのテキストから出発し、絵画、映像、インスタレーション……と展開していく「展覧会」は、現実を語り、記録すること、その試み自体を多角的に検証するもの。さらに、バックステージを含めた劇場全体を使ったプロジェクトは、現実に応答する「演劇」のあり方を、深部から見直す契機ともなるはずだ。

/プロフィール



小沢 剛 Tsuyoshi Ozawa ▶1965年東京生まれ。東京芸術大学在学中から風景の中に自作の地蔵を建立し、写真に収める《地蔵建立》を、93年から牛乳箱を用いた超小型移動式ギャラリー《なすび画廊》や《相談芸術》を開始。99年には日本美術史の名作を醤油でリメイクした《醤油画資料館》を、2001年より女性が野菜で出来た武器を持つポートレート写真シリーズ《ベジタブル・ウェポン》を制作している。04年に「同時に答えろYesとNo!」(森美術館)、09年に「透明ランナーは走りつづける」(広島市現代美術館)を開催。

/クレジット

作：エルフリーデ・イエリネク
 翻訳：林立騎
 演出・美術：小沢 剛

音楽監督：安野太郎
 照明：高田政義 (RYU)
 技術監督：寅川英司+鴉屋
 舞台監督：渡辺景介

製作・主催：フェスティバルトーキョー

F/T13イエリネク連続上演

日本

演劇

新作

光のない。(プロローグ?)

作：エルフリーデ・イエリネク

[オーストリア]

演出：宮沢章夫 [日本]

11月30日(土)～12月8日(日)

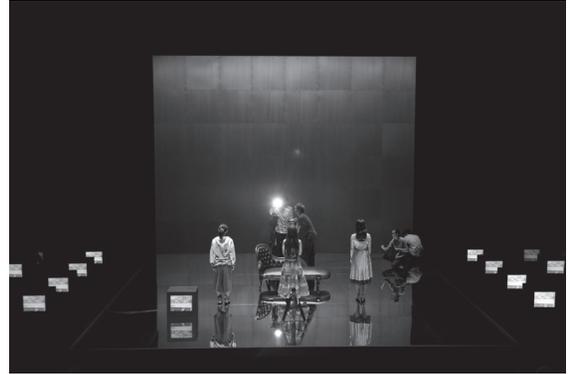
計10ステージ

東京芸術劇場 シアターウエスト

一般前売：¥4,000(当日+¥500)

自由席(整理番号付)

上演時間：120分(予定)



遊園地再生事業団「ジャパニーズ・スリーピング／世界でいちばん眠い場所」
© Nobuhiko Hikiji

/見どころ

- 1 ノーベル賞作家、エルフリーデ・イエリネクが3.11後の現実への応答として書いた『光のない。』シリーズの最新作に、現代都市と演劇の関係を探究する演出家・宮沢章夫が挑む
- 2 能の形式を媒介に「起こってしまったこと」(過去)と「それを語ること」(現在)の関係を思考する場が立ち上がる
- 3 70年代後期から現在まで、日本の小劇場演劇を代表する20～50代の5人の女優が出演

昨年のF/Tでも連続上演され、3.11以後の現実に向き合う問題作として大きな反響を呼んだ、ノーベル賞作家エルフリーデ・イエリネクの『光のない。』シリーズ。その最新作『光のない。(プロローグ?)』の演出に、遊園地再生事業団の宮沢章夫が取り組む。近年は主に現代都市と言語、身体の関係に取り組んできた宮沢が構想するのは、能の形式を媒介に、「起こったこと」(過去)と「それを語ること」(現在)の関係を検証する場をつくること。劇作・演出家、太田省吾との共同作業でも知られる安藤朋子、谷川清美をはじめ、70年代後期以後の日本の小劇場演劇を支える5人の女優の身体、語りに、現実とその表現をめぐるイエリネクの問いが映し出される。

/プロフィール



© Nobuhiko Hikiji

宮沢章夫 Akio Miyazawa ▶1956年静岡県生まれ。90年「遊園地再生事業団」の活動を開始、『ヒネミ』(92年)で第37回岸田國士戯曲賞受賞。『トータル・リビング 1986-2011』でF/T11に参加。その他、小説、評論などの執筆など活動は多岐にわたる。著作に、『14歳の国』(白水社)、『「80年代地下文化論」講義』(白夜書房)など。10年『時間のかかる読書—横光利一『機械』を巡る素晴らしきぐずぐず』で第21回伊藤整文学賞評論部門受賞。最新作は『ボブ・ディラン・グレート・ヒット第三集』(新潮社)。

/クレジット

作：エルフリーデ・イエリネク
 翻訳：林立騎
 演出：宮沢章夫

出演：安藤朋子、谷川清美、松村翔子、牛尾千聖、大場みなみ

美術：宮沢章夫
 照明：木藤 歩

音響：星野大輔(有限会社サウンドウィーズ)
 舞台監督：田中 翼
 演出助手：上村 聡
 制作：金長隆子
 協力：ARICA、演劇集団円

制作協力：遊園地再生事業団、ルアブル
 製作・主催：フェスティバルトーキョー

100% トーキョー

ドイツ

演劇

東京版初演

リミニ・プロトコル

作・構成：リミニ・プロトコル（ヘルガルド・ハウグ、
シュテファン・ケーギ、ダニエル・ヴェッツェル） [ドイツ]

演出：ダニエル・ヴェッツェル [ドイツ]

11月29日（金）～ 12月1日（日）

計3ステージ

東京芸術劇場 プレイハウス

一般前売：¥4,500（当日+¥500）

指定席

上演時間：90分（予定）

日本語上演



© Sandra Then

/見どころ

- ① 丁寧なリサーチをもとに、
日常の風景から未知の社会、個人の姿を
軽やかに切り出す、
気鋭のアート・プロジェクト・ユニットが
4年ぶりに東京での創作に挑む！
- ② 年齢、性別、居住地など、
東京の人口構成に基づいて集められた
100人の出演者による
Yes/No アンケート演劇
- ③ 出演者は原則24時間以内に
リレー（紹介）形式で選定。
8月2日現在、11人が決定。
- ④ 舞台上に現れる「生きた統計」
「動く意識調査」が、東京の現在と
そこに生きる人々の多様性を
浮き彫りにする

大学教授、投資家など、マルクス「資本論」との個人的
関係を語る人々の姿を通じ、改めてその大著の存在感を
実感させた『カール・マルクス：資本論、第一巻』（F/T09
春）、荷物に見立てた観客をトラックで輸送しグローバリズ
ムの功罪に言及するツアーパフォーマンス『Cargo Tokyo-
Yokohama』（F/T09秋）など、ドキュメンタリー的手法を用
い、現代社会と、そこに生きる個人の姿を鮮やかに切り出
すリミニ・プロトコル。4年ぶりの東京でのクリエーションと
なる本作は、東京の人口統計に基づいて集められた100人
の市民への生「Yes/Noアンケート」を主軸とする作品だ。
質問に従って舞台上を移動し、時に自らの経験や主張をマ
イクの前に語る人々……その眺めは、私たちの暮らす東京
の「縮図」であり、また未知の他者の存在を強く意識させる
ものともなるだろう。

/ 劇評・レビュー

ライブの統計——普段は、色とりどりのカーヴや棒、グラフィックやダイアグラムといった形で、パーソナルでない結果になる統計が、ここでは、表情を獲得する。

「ヴェルト (世界)」、2011年『100%ケルン』評

感銘を受けた。リミニ・プロトコルは都市の脈拍を感じ取る。言葉の力豊かに、人々を舞台へ上らせる。

「ライニッシェ・ポスト」、2011年『100%ケルン』評

約90分で、この作品は親密さを、また100人の見知らぬ人々に対する、最高の理解を生み出した。

「オージーシアター」、2012年『100%メルボルン』評

数学の分野を劇にできるのか？ 劇場で人口学の授業ができるのか？ そして、両方を愉快な一晩へと組み合わせられるのか？ 答えはイエスだ。

「ノイエ・ツアーリヒャー・ツァイトウング」2012年『100%ツアーリヒ』評

/ プロフィール



© Iko Freese/drama-berlin.de

リミニ・プロトコル Rimini Protokoll ▶ヘルガルド・ハウグ、シュテファン・ケーギ、ダニエル・ヴェッツェルによるアートプロジェクト・ユニット (2000年結成)。公共空間でのパフォーマンスやドキュメンタリー演劇の手法を用いた型破りなプロジェクトで世界の注目を集めている。日本では、『ムネモパーク』(東京国際芸術祭2008)、『カール・マルクス：資本論、第一巻』(F/T09春)、『Cargo Tokyo-Yokohama』(F/T09秋)などを上演し、好評を博した。11年、第41回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際演劇祭にて銀獅子賞受賞。

<http://www.rimini-protokoll.de/website/en/index.php>

/ 上演履歴

100%シリーズ

- ▶2008年2月、5月『100% Berlin』 HAU1 (ベルリン、ドイツ)
- ▶2010年5月『100% Vienna』 ウィーン芸術週間 (ウィーン、オーストリア)
- ▶2011年1月『100% Vancouver』 PuSH Festival 2011 (バンクーバー、カナダ)
- ▶2011年9月～11月、12年2月、4月
『100% Karlsruhe』カールスルーエ・バーデン州立劇場 (カールスルーエ、ドイツ)
- ▶2011年11月、12年1月『100% Cologne』 ケルン・シャウシュピール劇場 (ケルン、ドイツ)
- ▶2012年5月『100% Melbourne』 メルボルン・タウン・ホール (メルボルン、オーストラリア)
- ▶2012年5月～6月『100% Braunschweig』 THEATERFORMEN2012 (ブラウンシュバイク、ドイツ)
- ▶2012年6月～7月『100% London』 LIFTフェスティバル (ロンドン、イギリス)
- ▶2012年10月『100% Zurich』 ゲスナーアレー劇場 (チューリッヒ、スイス)
- ▶2013年6月『100% Cork』 コーク・ミッドサマー・フェスティバル (コーク、アイルランド)

/ クレジット

作・構成：リミニ・プロトコル (ヘルガルド・ハウグ、シュテファン・ケーギ、ダニエル・ヴェッツェル)
演出：ダニエル・ヴェッツェル
ドラマトゥルク・共同演出：セバスチャン・ブリュンガー
舞台・照明デザイン：マーク・ユングライトマイヤー、マーシャ・マズール
映像：マーク・ユングライトマイヤー

東京公演スタッフ

ドラマトゥルク：セバスチャン・プロイ
アシエート・ドラマトゥルク：萩原ヴァレントヴィッツ健
ローカライズ設計：深沢秀一
キャスティング：石塚 俊、小野塚 央
統計アドバイザー：中村和幸
演出補：大谷賢治郎
作曲・演奏：青柳拓次ほか
サウンドデザイン：小島ケイタニラブ+権藤知彦

冊子編集：影山裕樹 (OFFICE YUKI KAGEYAMA)
冊子デザイン：中澤耕平 (ASYL)
制作アシスタント：小野塚 央
協力：東京ドイツ文化センター
後援：ドイツ連邦共和国大使館
製作：フェスティバル/トーキョー、リミニ・プロトコル
主催：フェスティバル/トーキョー



The Coming Storm—嵐が来た

フォースド・エンタテインメント

演出：ティム・エッチェルス [イギリス]

11月29日(金)～12月1日(日)

計4ステージ

にしすがも創造舎

一般前売：¥4,500 (当日+¥500)

自由席 (整理番号付)

上演時間：105分 (予定)

英語上演、日本語字幕つき

イギリス

演劇

日本初演



© Hugo Glendinning

見どころ

- 1 「物語」の可能性と限界を探る、イギリスきっての先鋭的カンパニーによる遊び心満載の実験演劇
- 2 愛や死について、あるいは洗濯物について。さまざまな物語、音楽、ダンスが入り交じり、混乱する上演。「物語」は完遂されるのか——?
- 3 野放図に続くように思えるパフォーマンスに宿るバカバカしさ、そこはかたない哀愁が、観客を舞台に惹きつける

現代における演劇、パフォーマンスの意味を問い続けてきたイギリスのパフォーマンス・グループ、フォースド・エンタテインメント。彼らがおしゃべりやジョーク、マジック、ダンスなど、さまざまな「演劇的試行」を取り込みながら作り上げた壮大な実験劇が、日本初演される。よい物語とは何か？

よい物語に必要なものとは？ 6人の男女が語る物語は、愛や死、セックスから洗濯物の話まで、珍妙なダンスやふざけた楽器演奏も挟みながら、てんでバラバラに、互いに邪魔しあいつつよどみなく続いていく。それ自体に完成は訪れない。だが、パフォーマンス全体を貫くバカバカしさとそのかたない哀愁、その魅力は、物語と観客の豊かな関係性を予感させる。

/ 劇評・レビュー

いつものフォースド・エンタテインメントらしく、今作も陽気におかしく、同時にメランコリックで、心に触れる瞬間がある。——観客が見ているのは、プロセスである。物語を語っている状況を見るのであり、語られた物語を見るのではない。ときに、それは行き過ぎるほど個人的で、ときにまるでリサイクルのようでもあり、絵葉書の思い出のようである。センセーションを求めるといえば、思慮深くなり、そして衝動的にと次々と変化する。——『The Coming Storm』において、劇団は、コスチューム、髪、そして小道具の山を探る。そして、素人くさくダンスのステップを踏み、木製でできた電気椅子まで作り出す。……すべてはフィクションのため。すべては良い物語のため。もし、もっとも観客を楽しませる語られない物語に対する賞があったならば、『The Coming Storm』は確実にそれを受ける価値があるだろう。

Nachtkritik (ドイツ/アート情報サイト)

/ プロフィール

フォースド・エンタテインメント Forced Entertainment ▶イギリス、シェフィールドを拠点に活動する男女6人(ロビン・アーサー、ティム・エッチェルス、リチャード・ロウドン、クレール・マーシャル、キャシー・ナデン、テリー・オコネル)によるパフォーマンス・グループ。1984年から、演劇、インスタレーション、デジタルメディア、フィルムの方野で活動。さまざまな演劇的実験を通して、パフォーマンスの現代的意味を探る。即興とディスカッションを通して作られた作品の数々は、徹底的に遊びを取り入れつつ、現代の観客に語りうるものを探求し続けている。現在では、英国を代表するアヴァンギャルド・シアターとして国際的に評価されている。

(<http://www.forcedentertainment.com>)



© Hugo Glendinning

ティム・エッチェルス Tim Etchells ▶1962年生まれ。84年よりフォースド・エンタテインメントの設立メンバーとして、演出を務める。パフォーマンス、ビジュアルアートと物語の間を横断しながら、上演のライブ性や、時間や場にとらわれず自由に展開するイベント性に着目した作品作りをしている。フォースド・エンタテインメントでの活動のほかにも、ソロアーティスト、作家として、幅広い分野で活躍の場を広げている。ランカスター大学パフォーマンス学教授。

(<http://www.timetchell.com>)

/ 上演履歴

『The Coming Storm—嵐が来た』

- ▶2012年 5月 世界初演、パクト・ツォルフライン(エッセン、ドイツ)
- 6月 シアターフォーメン(ブラウンシュヴァイク、ドイツ)
- 6月 ゲスナーアレー劇場(チューリッヒ、スイス)
- 6月 パタシー・アート・センター：LIFTロンドン国際演劇祭(ロンドン、イギリス)
- 7月 アヴィニョン演劇祭(アヴィニョン、フランス)
- 10月 タンツクォーター劇場(ウィーン、オーストリア)
- ▶2013年 3月 フラスカティ劇場(アムステルダム、オランダ)
- 3月 HAU劇場(ベルリン、ドイツ)
- 9月 ザグレブ演劇祭(ザグレブ、クロアチア) [予定]
- 10月 トラムウェイ劇場(グラスゴー、イギリス) [予定]
- 11月 シャッス劇場(ブレダ、オランダ) [予定]

/ クレジット

構成・作：フォースド・エンタテインメント
 出演：ロビン・アーサー、フィル・ヘイズ、リチャード・ロウドン、クレール・マーシャル、キャシー・ナデン、テリー・オコネル
 演出：ティム・エッチェルス
 デザイン：リチャード・ロウドン
 照明デザイン：ニガール・エドワード
 音響：フィル・ヘイズ、フォースド・エンタテインメント
 音響コンサルタント：ジョン・アバリー
 演出助手：ヘスター・チリングワース
 制作：ライ・レニー、ジム・ハリソン
 共同製作：パクト・ツォルフライン(エッセン)、アヴィニョン演劇祭、ゲスナーアレー劇場(チューリッヒ)、タンツクォーター劇場(ウィーン)、

レ・スベクタクル・ピボン(パリ、ボンピドゥーセンター)、フェスティバル・ドートンヌ(パリ)、LIFT(ロンドン)、パタシー・アート・センター(ロンドン)、シェフィールド・シティ・カウンシル

特別協力：ブリティッシュ・カウンシル
 主催：フェスティバル/トーキョー



Supported using public funding by
ARTS COUNCIL ENGLAND



フォースド・エンタテインメントは、アーツカウンシル・イングランドより助成を受けています。

ガネーシャ VS. 第三帝国

オーストラリア

演劇

日本初演

バック・トゥ・バック・シアター

演出：ブルース・グラッドウィン [オーストラリア]

12月6日(金)～12月8日(日)

計3ステージ

東京芸術劇場 プレイハウス

一般前売：¥4,500 (当日+¥500)

指定席

上演時間：100分(予定)

英語上演、日本語字幕つき



© JEFF BUSBY

舞台写真

見どころ

- ① ナチスの第三帝国によって奪われた幸福の印「卍」を取り戻す——。インドの神ガネーシャの冒険とそれを上演する劇団内でのいざこざを描き、数々の賞を受賞、世界7カ国16都市で上演された話題作をアジア初演!
- ② 知的障がいを持つ俳優たちとの共同作業が、物語を語ることとその裏側にある現実との関係を露わにする
- ③ アジアとヨーロッパ、神話の世界と人間界を横断するイメージ豊かな空間

映像や照明を駆使したイメージ豊かな空間づくりと、「生命」や「美」をめぐるさまざまな「標準」に斬り込む哲学的な思考で知られるオーストラリアの劇団、バック・トゥ・バック・シアター。知的障がいを持つ俳優たちと共に創作を続ける彼らが、インドの神ガネーシャの冒険譚とそれを上演する劇団内でのいざこざを描き、世界各国で好評を博した話題作を、ついにアジア初演する。果たしてガネーシャは、ナチス(第三帝国)に奪われた幸福の印「卍」(スワステカ)を取り戻すことができるのか——。時空を超えたファンタジックな冒険と、演出家と俳優たちの中で起こるリアルな揉め事との対比が、時にユーモアさえ感じさせながらも、物語を語ることと、その裏側にある現実との関係に鋭く迫っていく。

/ 劇評・レビュー

観客を決して受身に落ち着かせることを許さない点で傑出した作品である。演劇の全てを知っていると思う演劇愛好家にこそ必要な目の覚めるような特効薬である。

Ben Brantley, The New York Times (アメリカ/新聞)

バック・トゥ・バック・シアターは“特別”扱いとは無縁である。いやむしろ彼らの行き過ぎる正直さは、ひいきできなくなるほどである。一方で、彼らの真の技術力を見せ付ける息を呑むような美しい瞬間も彼らの作品の特長である。[中略]私は今までこのような作品を観たことがない。まさに、バック・トゥ・バック・シアターだけが作れる作品である。私たちにあって、彼らは最も重要なインディペンデント・シアターカンパニーの一つである。 Alison Croggon, Theatrenotes (オーストラリア/演劇批評サイト)

/ プロフィール

バック・トゥ・バック・シアター Back to Back Theatre ▶オーストラリア、ジーロングで知的障がいとみなされる人たちの演劇創作を目的に1987年に設立された。5名の俳優たちからなるアンサンブルとのフルタイムのコラボレーションにより独特の芸術スタイルを育ててきた。彼らは完璧さや外見の美しさを追い求める文化において、完全なアウトサイダーである。こうした周辺的な立場にある彼らはユニークで、時に破壊的な世界観をもつ。そこから作り出される物語は現代の冷たく、暗い側面を大胆に探求するものだ。



© JEFF BUSBY

ブルース・グラッドウィン Bruce Gladwin ▶演出家、デザイナー、作家として実験的な演劇製作に携わる。1998年、アリーナ・シアター・カンパニーとの協同作品『人類三部作』でのテクノロジーと演劇のダイナミックな融合で注目を集める。99年、同作での創造性あふれる斬新で実験的な新しい演劇言語を生み出そうとする取り組みで、アジテジ国際児童青少年演劇協会国際名誉協会賞を受賞。バック・トゥ・バック・シアターでは、『メンタル』(99年)、『ドッグ・ファーム』(2000年)、『ソフト』(02年)、『スモール・メタル・オブジェクト』(05年)、『フード・コート』(08年)、『ガネーシャ VS. 第三帝国』(11年)を製作。

/ 上演履歴

『ガネーシャ VS. 第三帝国』

- ▶2012年 2月 オーストラリア舞台芸術見本市(アデレード、オーストラリア)
- 5月 ウィーン芸術週間(ウィーン、オーストリア)
- 6月 LIFTロンドン国際演劇祭(ロンドン、イギリス)
- 9月 ロッテルダム市立劇場(ロッテルダム、オランダ)
- ▶2013年 1月 アンダー・ザ・ラダー・フェスティバル(ニューヨーク、アメリカ)
- 2月-3月 ジーロング・パフォーミングアーツ・センター(ジーロング、オーストラリア)
- 4月 ル・マリオン、テアトル・デ・ストラズブール(ストラズブール、フランス)
- 4月 HAU劇場(ベルリン、ドイツ)
- 5月-6月 フェスティバル・トランスアメリク(モントリオール、カナダ) ほか

/ 関連プログラム

F/T×東京芸術劇場ユース・プログラムとして、バック・トゥ・バック・シアターによるワークショップ、シンポジウムを12月10日(火)、11日(水)に開催します。詳細は、F/Tウェブサイトにて発表します。

/ クレジット

演出：ブルース・グラッドウィン
 出演：マーク・ディーンズ、サイモン・ラフティ、スコット・ブライス、
 ブライアン・テリリー、ディビット・ウッズ
 協同創作：ブルース・グラッドウィン、マーク・ディーンズ、
 マルシア・ファーガソン、ニック・ホランド、サイモン・ラフティ、
 サラ・メインワリング、スコット・ブライス、ケイト・スーラン、ブライアン・テリリー、
 ディビット・ウッズ
 照明デザイン：アンドリュー・リビングストーン
 舞台美術：マーク・カフバートン
 デザイン&アニメーション：リアン・ヒンキリー
 作曲家：ヨハン・ヨハンソン

衣裳：大谷 汐
 協力：オーストラリア・アーツ・カウンシル、アーツ・ヴィクトリア、
 メルボルン・フェスティバル、マルトハウス劇場、メルボルン市、
 シドニー・メイヤー・ファンド、キール財団、
 キット・ダントン・フェローシップ2009、
 ナショナル・シアター・スタジオ(ロンドン)、
 ジーロング・パフォーミングアーツ・センター、ドイツ文化センター
 助成：豪日交流基金
 後援：オーストラリア大使館
 主催：フェスティバル・トーキョー



フェスティバル/トーキョー13における「ガネーシャ VS. 第三帝国」東京公演は、外務貿易省の一部である豪日交流基金を通じてオーストラリア連邦政府の助成を受けています。

石のような水

作：松田正隆 [日本]

演出・美術：松本雄吉 [日本]

12月5日(木)～12月8日(日)

計6ステージ

にしすがも創造舎

一般前売：¥4,500(当日+¥500)

自由席(整理番号付)

上演時間：120分(予定)

/見どころ

- 1 タルコフスキーの映画『ストーカー』(1979年)等を下敷きに、松田正隆が書き下ろすSFメロドラマ
- 2 数々の野外劇を手がける松本雄吉(維新派)が、劇場空間に立ち上げる「終わり」のあとの風景
- 3 立ち入り禁止区域「ゾーン」をめぐる人間模様。不穏な静けさの中で呼び起こされる「記憶」が、人々の「現在」を浮かび上がらせる

/プロフィール



© Clippin JAM

松本雄吉 Yuichi Matsumoto ▶1946年熊本県天草生まれ。大阪教育大学で美術を専攻。70年維新派を結成。74年以降の全ての作品で脚本・演出・構成を手がけ、独自のスタイル「チャンチャン☆オペラ」を確立。野外にこだわり、奈良・室生、岡山・犬島などで公演を行う。2002年朝日舞台芸術賞、05年読売演劇大賞優秀演出家賞、09年朝日舞台芸術賞・アーティスト賞、芸術選奨文部科学大臣賞、11年紫綬褒章受章。F/Tには、09秋『ろじ式』、11年『風景画—東京・池袋』で参加。



松田正隆 Masataka Matsuda ▶1962年長崎県生まれ。97年まで劇団「時空劇場」代表。96年『海と日傘』で第40回岸田國士戯曲賞、98年『月の岬』で読売演劇大賞作品賞、98年『夏の砂の上』で読売文学賞、2001年に京都府文化奨励賞受賞。戯曲の他映画の脚本・原作も手がける。03年「マレビトの会」を結成。主な作品に『島式振動器官』『声紋都市—父への手紙』(F/T09秋)『PARK CITY』『HIROSHIMA-HAPCHEON：二つの都市をめぐる展覧会』(F/T10)『アンティゴネーへの旅の記録とその上演』(F/T12)がある。立教大学現代心理学部映像身体学科教授。

/クレジット

作：松田正隆
演出・美術：松本雄吉

参照作品：『ストーカー』、『惑星ソラリス』等(いずれもアンドレイ・タルコフスキーの映画作品)

出演：山中 崇、占部房子、武田 暁、
小坂浩之、酒井和哉、筒井 潤、西山真来、幅司健太、
増田美佳、森 正史、山口恵子、和田華子

照明：吉本有輝子
音響・音楽：荒木優光、佐藤武紀
衣装：清川教子
舞台監督：大田和司

舞台監督助手：浜村修司
美術制作：柴田隆弘
宣伝美術：塚原悠也(contact Gonzo)
デザイン協力：西村
空撮協力：小川航空
制作：川原美保
制作・広報：土屋和歌子
制作助手：山崎佳奈子
企画立案：松田正隆、森山直人(京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター)
制作協力：維新派、マレビトの会、torindo、丸井重樹
製作：京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター
共同製作・主催：フェスティバル/トーキョー
京都芸術センター制作支援事業



© Yuya Tsukahara

悲劇を知る都市の記憶と取材者自身の体験とを交叉させる『ヒロシマーナガサキ』シリーズ、物語の断片を街なかで散発的に上演する『マレビト・ライブ』など、先鋭的な試みが続けるマレビトの会の松田正隆が、タルコフスキーの映画『ストーカー』等を下敷きにした「メロドラマ」の執筆に取り組む。演出は、数々の野外劇を通じて未知の風景を出現させてきた維新派の松本雄吉。「演劇」「劇場」のあり方をラジカルに問い直す二人が、今、敢えて劇場空間で展開する物語演劇に向き合う。決定的(と思われた)破局の後の世界。立ち入り禁止区域「ゾーン」への案内人とその家族、死者と再会するためそこを訪れる人々が織りなす人間模様が、不穏で不安定な都市の日常を浮かび上がらせる——。

F/Tシンポジウム

シンポジウム

第一線のアーティストやディレクター、評論家を迎え、F/Tの上演作品や海外での事例を手がかりとしながら、理論と実践を横断し、演劇と社会との接続を考える。

※日時、会場など詳細は、決定次第F/Tウェブサイトにて発表。



F/T13 [オープン・プログラム] フェスティバル/トーキョー

池袋にひろがる祝祭空間

F/T13では、より多くの人とフェスティバルが出会う「F/Tオープン・プログラム」を新設!

文字通り“フェスティバルを開く”ために、立ち寄った誰もが気軽に、無料で、フェスティバルを体感できるプログラムを展開する。地域の既存のネットワークやコミュニティ、池袋の街を訪れる人々、F/Tに参加するアーティスト、スタッフ、観客……全ての人とF/Tをつなぎ、フェスティバルをいっそう盛り上げる!

F/T13 オープニング・イベント

いとうせいこう×宮沢章夫、椿昇、
F/T モブの参加アーティストたちが、
F/T13 の開幕を盛り上げる!

11月9日(土)

12:00より

東京芸術劇場、池袋西口公園ほか

入場無料(一部有料プログラムあり)

当日のタイムテーブルなどはF/Tウェブサイトにて後日発表。

無料

参加型

演劇

ダンス

音楽

美術

トーク

屋台村



© Takaki Sudo

© Tsukasa Aoki

F/T初の試みとなる、オープニング・イベントでは、F/T13の開幕を観客と共に盛り上げる企画を多数実施。F/T13のテーマ「物語を旅する」に応答するスペシャルプログラムとして、いとうせいこう×宮沢章夫によるリーディングライブや、椿昇による巨大オブジェのお披露目イベント、トークなどが行われるほか、シアタースタジオ・インドネシアの公演に合わせたアジア料理の屋台村も登場。西口公園周辺がさまざまなイベントで彩られる。



いとうせいこう Seiko Ito ▶ 1961年、東京都生まれ。編集者を経て、作家、クリエイターとして、活字・映像・音楽・舞台など、多方面で活躍。著書に小説『ノーライフキング』『見仏記』(みうらじゅんと共著)エッセイ集『ボタニカル・ライフ』(第15回講談社エッセイ賞受賞)など。今年16年ぶりの小説『想像ラジオ』を発表した。テレビでは「シルシルミシルさんデー」(テレビ朝日)「ビットワールド」(Eテレ)「オトナの!」(TBS)などにレギュラー出演中。

F/Tモブ・スペシャル

無料

参加型

ダンス

音楽

フラッシュモブの手法を使った
一般参加型の群衆パフォーマンス。
今年も F/T の本拠地・池袋全域で展開!

11月9日(土)～12月8日(日) 毎週末

池袋エリア

※詳細は決定次第、F/Tウェブサイトで発表

参加料：無料

※11月9日(土)のオープニング・イベントには、F/Tモブ参加アーティスト全員が集結します!



© Ryosuke Kikuchi

メールやSNSなどを通じて集まった不特定多数の人間が、駅、空港などの公共空間で突如として同じ行為を行い、散会するフラッシュモブ。「F/Tモブ・スペシャル」ではフラッシュモブの手法を用い、一般参加型の群衆パフォーマンスをF/Tの本拠地・池袋の複数箇所で開催する。



© HARU

近藤良平 Ryohei Kondo (コンドルズ)

▶ペルー、チリ、アルゼンチン育ち。振付家、ダンサー、コンドルズ主宰。第4回朝日舞台芸術賞寺山修司賞受賞。NHK教育『からだであそぼ』で振付出演。他、宮崎あおい主演ミュージカル『星の王子さま』、三池崇史監督映画『カタクリ家の幸福』などの振付も担当。2007年、野田秀樹演出『THE BEE』で鮮烈役者デビュー。同作品は朝日舞台芸術賞グランプリなど主要演劇賞を制覇。横浜国立大学などで非常勤講師としてダンスの指導もしている。



三浦康嗣 Koshi Miura (□□□) ▶□

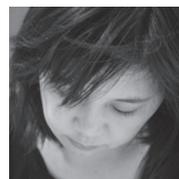
□□ (クチロロ) 主宰。スカイツリー合唱団主宰。作詞、作曲、編曲、プロデューサー、演奏、歌唱、プログラミング、エディット、音響エンジニアリング、舞台演出・・・等々を一人でこなし、多角的に創作に関わる総合作家。2010年第54回岸田國士戯曲賞受賞作『わが星』の音楽担当、音楽劇『ファンファーレ』の音楽、演出を担当。□□□最新作アルバムは13年3月に発売された『JAPANESE COUPLE』。



© Rhys TURNER

古家優里 Yuri Huruie (プロジェクト大山)

▶振付家、ダンサー。熊本県出身。熊本バレエ研究所で学び、熊本高校を経て、お茶の水女子大学文教育学部芸術表現行動学科・舞踊教育学コース卒業。大学の同級生と立ち上げたダンスグループ「プロジェクト大山」主宰。2009年横浜ダンスコレクションRにて「審査員賞」、10年トヨタコレオグラフィアワードにて「次代を担う振付家賞」を受賞。



矢内原美邦 Mikuni Yanaihara (ニブロール)

▶振付家、演出家、劇作家、ニブロール主宰。日常的な身振りをベースに現代をドライに提示する独自の振付で国内外のフェスティバルなどに招聘されている。劇作・演出も手がけ2012年第56回岸田國士戯曲賞を受賞。off-Nibroll名義で美術作品も制作し、数々の展覧会に参加。プロダクションIG製作アニメーション『ホッタラケの島』で振付担当、ダンスと演劇、美術などの領域を行き交いながら作品制作を行う。日本ダンスフォーラム大賞、NHK賞、ラオコン(略)賞、横浜市文化芸術奨励賞受賞。近畿大学舞台芸術学科准教授。

椿昇『KEINE STIMME. 一声のない。 inspired by EPILOG?』

無料

美術

現代美術家・椿昇による巨大オブジェが
東京芸術劇場のアトリウム内に出現!

11月9日(土)～12月8日(日)

常時展示

※11月11日(月)、12日(火) 休み

東京芸術劇場 アトリウム

入場無料



霧島アートの森2012年「RIGHT SHEEP」



京都造形大学2012年「グループワークショップ-京造ねぶた-」

都市におけるアートと社会の関係を問い直してきた現代美術家の椿昇が、F/T13のテーマに呼応し、ギリシャ悲劇やエルフリーデ・イエリネクの戯曲に想を得た巨大なバルーンオブジェを制作。東京芸術劇場アトリウムに浮かぶ本作は、空前のスケールで、フェスティバルを訪れるすべての人々に強い印象を与えるだろう。



椿昇 Noboru Tsubaki ▶現代美術家。1953年、京都市生まれ。京都市立芸術大美術専攻科修了。1993年ベネチア・ビエンナーレ、2001年横浜トリエンナーレに出品。02年にイデビアン・クルー『くるみ割り人形』の舞台美術を担当。10年には六本木アートナイトメインアーティストをつとめ、瀬戸内国際芸術祭で2つのプロジェクトを製作。アートと社会の関係を問い直す衝撃的な作品やシステムを提案している。京都造形芸術大学教授／美術工芸学科長。

F/Tステーション

舞台と観客、街とをつなぐ

—F/Tのフェスティバル・センター

11月9日(土)～12月8日(日)

12:00-20:00

※11月11日(月)、12(火) 休み

インフォメーションブース

東京芸術劇場内

入場無料

インフォメーション

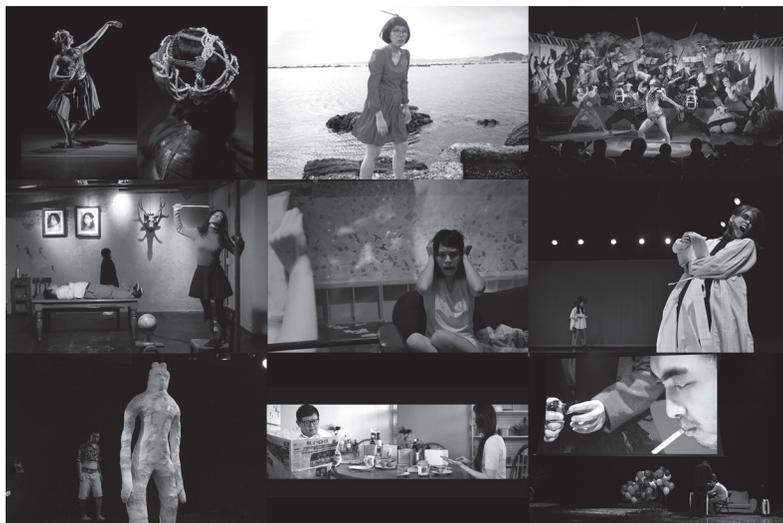
ショップ

カフェ

チケット

誰もが自由に立ち寄り、語り合えるフェスティバル・センター「F/Tステーション」。今年も東京芸術劇場をベースに、さまざまな館内施設とも連携し、総合案内やチケット販売、イベント開催など、フェスティバルを訪れる人のさまざまなニーズに応えます。F/T参加アーティストや演目に関する最新情報も発信しながら、過去演目の映像、関連資料などのアーカイブ閲覧スペースもあり。

F/T13 [公募プログラム] フェスティバル / トーキョー



/ F/T アワード 審査員プロフィール

鮎屋法水：演出家・美術家

1961年生まれ。状況劇場を経て、東京グランギニョル、M.M.M.を結成。90年代は美術家として活動するも、95年のベネチア・ビエンナーレ参加後は作家活動を停止。

2005年「バングラ」展で美術活動を、07年『転校生』（F/T09春で再演）の演出で演劇活動を再開。近年の活動に、国東半島アートプロジェクト2012への参加、13年『ブルーシート』の演出がある。F/Tには、09春・秋、10、11に参加。

鴻 英良：演劇批評家

1948年生まれ。専門はロシア芸術思想。ウォーカー・アート・センター・グローバル委員、国際演劇祭ラオコロン芸術監督、舞台芸術研究センター副所長を歴任。著書に『二十世紀劇場—歴史としての芸術と世界』、共著に『反響マシーン—リチャード・フォアマンの世界』ほか、訳書にカントール『芸術家よ、くたばれ!』、タルコフスキー『映像のポエジア』など多数。『シアターアーツ』第一期編集代表、『舞台芸術』（1～10号）編集委員。

シュテファニー・カーブ：ドラマトゥルク

ベルリンで文学博士号を取得後、ドラマトゥルクとして、デュッセルドルフ劇場、バーゼル劇場などで活動。チューリヒ劇場のチーフ・ドラマトゥルク兼共同監督（2000-04年）、フォルクスビューネのチーフ・ドラマトゥルク（05-07年）、ウィーン芸術週間の演劇部門監督（04年7月-05年6月、07年8月-13年6月）を歴任。このほか、制作担当ドラマトゥルクとして、主にクリストフ・マルターラーとの仕事に従事。

森山直人：演劇批評家

1968年生まれ。京都造形芸術大学舞台芸術学科教授、同大学舞台芸術研究センター主任研究員、機関誌『舞台芸術』編集委員。KYOTO EXPERIMENT（京都国際舞台芸術祭）2013実行委員長。著書に『舞台芸術への招待』（共著、放送大学教育振興会）、主な論文に『沈黙劇とその対部—あるフィクションの起源をめぐって』（ドキュメンタリー）が切り開く『舞台』など。

リー・イーナン：ドラマトゥルク

1972年北京生まれ。中央戯劇学院演劇学准教授。北京大学卒業後、コロンビア大学にて演劇学を学ぶ。2007年博士課程取得。06年以降、ミュンヘン大学、フランクフルト大学、中央戯劇学院（北京）で演劇とドラマトゥルギーの教鞭をとる。09年国際シンポジウム『北京におけるドラマトゥルギー』を企画。ドイツで習得したドラマトゥルギーのコンセプトや手法の普及に努める。ハンス＝ティース＝レーマン『ポストドラマ演劇』を中国語翻訳。

アジアから世界へ。若い才能の飛躍の場を創出する

次世代を担う若手アーティスト、カンパニーの自主公演をサポートする「F/T公募プログラム」も今年で4回目の開催となる。F/T11からは対象をアジア全域に拡大、今年には137件の応募の中から、6つの国と地域から9団体（日本：4、中国：1、台湾：1、韓国：1、シンガポール：1、インド：1）が選出された。テーマも手法もそれぞれに異なる作品群からは、同時代表現の多様性はもちろん、アジア共通の課題や可能性も浮かび上がってくる。

本プログラムは、アジアにおいて作品、才能が集まる場としてだけでなく、その批評（評価）、流通が行われるプラットフォーム機能を有することを目指す。また、全作品を対象に、新しい価値を創造する作品を顕彰する「F/Tアワード」も引き続き開催。

	F/T10	F/T11	F/T12	F/T13
応募数	80 団体 ※国内のみ	150 団体 (国内 70 団体、 海外 80 団体)	180 団体 (国内 94 団体、 海外 86 団体)	137 団体 (国内 74 団体、 海外 63 団体)
参加数	8 団体	11 団体	11 団体	9 団体
アワード受賞者	—	振子びじん	シアタースタジオ・インドネシア	12/8 に決定

新しい価値を創造する 「F/T アワード」

F/T13公募プログラムの参加作品を対象とし、受賞者には次年度の主催プログラムとしての創作・発表の権利を約束するF/Tアワード。創作拠点の異なる作品を1つの評価基準で審査することは、個々のアーティストの方法論、同時代の表現に対する意識をいっそう深めることにもつながる。今年も、中国、ドイツからの審査員も参加し、これまで以上に多角的な視点からの審査が期待される。

F/T13 [公募プログラム]

フェスティバル/トーキョー

公演データ

ダンシング・ガール



ゴージャル・スジャータ
振付:ゴージャル・スジャータ [インド]

インド伝統舞踊と
現代のはざまで。
葛藤から見出された美

11月26日(火)~11月27日(水)
シアターグリーン BOX in BOX THEATER
一般前売: ¥2,000 (当日+500円)
自由席 (整理番号付) / 上演時間: 40分 (予定)

ダンス



© Roger Casas

ゴージャル・スジャータ
Sujata Goel

▶ 振付家、ダンサー。1979年アメリカ生まれ。インド古典舞踊・バラタナティウムとコンテンポラリーダンスを学ぶ。2001年にインドの芸術大学を卒業し、04年までチェンナイを拠点に活動する振付家/ドミニ・チェターのもとで活躍。その後、ベルギーのブリュッセルでコンテンポラリーダンスを学んだ後、ヨーロッパを拠点に活動。10年から12年にかけて、インドの芸術財団から助成を受け『ダンシング・ガール』を創作した。

たのもしいむすめ



© Kentaro Minoura

柴田聡子
構成:柴田聡子 [日本]

ギター抱えて。あふれ出す
「ことば」と「うた」の時間

11月26日(火)~11月27日(水)
アサヒ・アートスクエア
一般前売: ¥2,500 / 自由席 (整理番号付) 上演時間: 60分 (予定)
日本語上演、英語解説つき

音楽 演劇



© Ichiko Uemoto

柴田聡子
Satoko Shibata

▶ 歌手。1986年札幌市生まれ。2010年より都内を中心にライブ活動始める。11年、夏と冬に2枚のデモCDを発表。東京芸術大学大学院映像研究科2011年度修了制作展「MediaPractice11-12」のテーマソングにボーカルで参加。12年6月、ファーストアルバム「しばたさとし島」を浅草橋天才算数塾より発表。同年11月には同アルバムの10インチ・アナログレコードをなりすレコードより発売。

HELLO HELL!!!



© Kiyoe Akachi

劇団子供鉦人
作・演出:益山貴司 [日本]
関西演劇界の風雲児が贈る、
渾身の社会派ミュージカル!

11月28日(木)~12月2日(月)
シアターグリーン BIG TREE THEATER
一般前売: ¥3,500 (当日+300円)
自由席 / 上演時間: 120分 (予定)

演劇



益山貴司
Takashi Masuyama

▶ 劇団子供鉦人主宰、劇作家、演出家、役者。1982年大阪生まれ。幼稚園の学芸会における「馬に乗る人」役で演劇デビュー。高校のクラブ活動から演劇活動を開始し、2005年に劇団子供鉦人を結成、全作品の作・演出を手がける。12年に、劇団子供鉦人としてフランス・リール地方の現代美術展lille3000に参加。個人では、野田秀樹率いるNODA・MAPやラジオドラマへの出演、短編小説の連載など、多方面で活躍している。

いのちのちQII

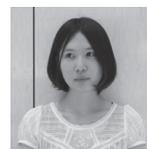


© Satoko Ishihara

Q
作・演出:市原佐都子 [日本]
かわいくって生々しい。
新世代の女子が見た飼育、血統

11月29日(金)~12月1日(日)
アサヒ・アートスクエア
一般前売: ¥2,500 (当日+500円) ほか
自由席 / 上演時間: 90分 (予定)
日本語上演、英語字幕つき

演劇



市原佐都子
Satoko Ichihara

▶ 劇作家、演出家。1988年生まれ、福岡県北九州市出身。桜美林大学在学中、自身初となる作・演出作品『虫虫Q』を卒業研究として発表。卒業後、Qを始める。2011年、戯曲『虫』で第11回AAF戯曲賞優秀賞受賞。13年にTPAM2013ショーケース参加作品として『いのちのちQ』を上演。また、Crackersboat主催のflat plat fesdesu Vol.2に『最新の私は最強の私』で参加。

真夏の奇譚集



© Shinehouse Theatre

演劇

シャインハウス・シアター
作・演出：ジョン・ポーユエン [台湾]
台湾のマルチクリエイター×
ジャパニーズ・ホラーの邂逅

11月29日(金)～12月1日(日)
 シアターグリーン BASE THEATER
 一般前売：¥2,000 (当日+500円)
 自由席(整理番号付) / 上演時間：60分(予定)
 中国語上演、日本語字幕つき



© Shinehouse Theatre

ジョン・ポーユエン
Poyuan Chung

▶劇作家、演出家。1985年台湾生まれ。国立台北芸術大学で演出を学ぶ。2006年にシャインハウス・シアターを旗揚げし、現在までに20以上のオリジナル作品を創作している。

11年に『真夏の奇譚集』が台新芸術賞にノミネート。創作活動だけでなく、大学で演劇の講師をするなど、台湾の芸術教育にも貢献。演劇作品のほか、アニメ作品の脚本も手がける。また、俳優として、広告、テレビ、映画などでも活躍している。

地の神は不完全に現わる

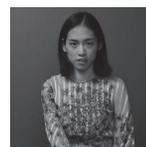


© Sanghoon Ok

ダンス

ソ・ヨンラン
構成・振付：ソ・ヨンラン [韓国]
多角的な視点、手法で舞踊と
音楽の始原に触れる多元芸術

11月30日(土)～12月1日(日)
 シアターグリーン BOX in BOX THEATER
 一般前売：¥2,000 (当日+500円)
 自由席(整理番号付) / 上演時間：60分(予定)
 韓国語上演、日本語字幕つき



© Jirock Lee

ソ・ヨンラン
Yeongram Suh

▶振付家、パフォーマー。多元芸術アーティスト。梨花女子大学校で舞踊を専攻。韓国芸術総合学校の舞踊科修士課程を卒業し、2008年より個人での創作活動をはじめ。

モンゴルやオーストリアなど、国内外でレジデンシープログラムに参加。子供向けのワークショップも積極的に行っている。12年には『I confess my faith』、13年には『地の神は不完全に現わる』で韓国のフェスティバル・ボムに参加。

野良猫の首輪

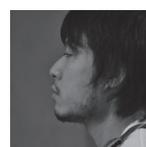


© Jirock Lee

演劇

sons wo:
作・演出：カゲヤマ气象台 [日本]
身体と言葉の断裂、反射に
見出される「冒険物語」のカタチ

12月4日(水)～12月7日(土)
 シアターグリーン BOX in BOX THEATER
 一般前売：¥2,500 (当日+300円) ほか
 自由席 / 上演時間：80分(予定)
 日本語上演、英語字幕つき



© Jirock Lee

カゲヤマ气象台
Kishodai Kageyama

▶劇作家、演出家、sons wo:主宰。1988年静岡県生まれ。早稲田大学第一文学部卒。2008年にsons wo:を設立、主に脚本、演出、音響デザインを手がける。発話や身体から連続性を排除した「機械仕掛けのシアター」を構築しながら、そこで起こる現象にあくまでも独りで対峙できるような「開かれた自己内省のための場」としての演劇空間を追求している。TOLTA、サンズイなど、現代詩ユニットの活動にも参加。13年に芸創CONNECT Vol.6最優秀賞受賞。

クラウド



© Tara Tan

演劇 美術

タン・タラ
構成・演出：タン・タラ [シンガポール]
人と都市、記憶をめぐる
デジタル・ビジュアルシアター

12月5日(木)～12月7日(土)
 シアターグリーン BASE THEATER
 一般前売：¥2,000 (当日+500円)
 自由席(整理番号付) / 上演時間：60分(予定)
 中国語・日本語上演、日本語字幕つき



© Tara Tan

タン・タラ
Tara Tan

▶インタラクティブデザイナー。2007年より創作活動を開始。ブリストル大学で演劇を学び、現在はハーバード大学大学院でデザインとテクノロジーを研究中。多様なメディアを用い、芸術とテクノロジー、身体とデジタルメディアを横断する作品を創作している。10年に短編映像作品が上海万博のほか、シンガポールやロンドン、オーストラリアなどで上映。12年には『Songbird』がシンガポールアートフェスティバルで上演された。

地雷戦 2.0



© Zhou Jing

演劇

しんでん
新伝実験劇団
作・演出：ワン・チョン [中国]
プロパガンダ
ネタは60年代の啓蒙映画。
中国実験演劇の進化形

12月5日(木)～12月7日(土)
 シアターグリーン BIG TREE THEATER
 一般前売：¥2,000 (当日+¥500)
 自由席(整理番号付) / 上演時間：75分(予定)
 中国語上演、日本語字幕つき



© Zhou Jing

ワン・チョン
Chong Wang

▶劇作家、演出家、新伝実験劇団主宰。1982年北京生まれ。北京大学で経済と法律を学び、ハワイ大学で演劇を研究し修士号を取得。2008年北京にて新伝実験劇団を設立。マルチメディアパフォーマンスやドキュメンタリー演劇を創作、中国の実験演劇界を牽引している。アジア各地やヨーロッパで公演を行うなど、国外でも精力的に活動。12年には利賀村で開催されたアジア演出家フェスティバルにも参加。戯曲や書籍、劇評の翻訳なども行っている。

F/T13

フェスティバル/トーキョー

連携プログラム

F/T と同時期に都内で開催される
多様な作品群を世界に紹介します。

NODA・MAP 第18回公演

『MIWA』

演劇

世界初演

NODA・MAP

作・演出：野田秀樹 [日本]

10月4日(金)～11月24日(日)

東京芸術劇場 プレイハウス

『もう風も吹かない』

演劇

青年団

作・演出：平田オリザ [日本]

11月7日(木)～11月18日(月)

吉祥寺シアター

『ピュディック・アシッド』／

『エクスタシス』

ダンス

日本初演

振付：マチルド・モニエ&

ジャン＝フランソワ・デュルール

[フランス]

11月9日(土)

彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

『クリプトグラム』

演劇

日本初演

作：デイヴィッド・マメット [アメリカ]

翻訳・演出：小川絵梨子 [日本]

11月6日(水)～11月24日(日)

シアタートラム

日本・中国・韓国 国際共同制作作品

『祝／言』

演劇

作・演出：長谷川孝治 [日本]

11月29日(金)～12月1日(日)

新国立劇場 小劇場

『無頼漢』

演劇

世界初演

テラヤマプロジェクト

原作：寺山修司、脚本：中津留章仁、

音楽：上妻宏光、演出：流山児祥 [日本]

11月21日(木)～12月1日(日)

豊島公会堂(みらい座いけぶくろ)

F/T13

フェスティバル/トーキョー

チケット情報

10月5日(土) 10:00より一般前売開始!!

9月28日(土) よりF/Tチケットセンターにて先行発売開始

F/Tならではのお得なチケットや今年から新設されたお得なパスも多数!

◎3演目セット割

主催+公募プログラム(国内・海外)からお好きな3演目を選び、お得に観劇できるチケット。 ¥9,900

◎海外演目スペシャルパス(新設・限定数販売)
海外作品7作品+公募プログラム(海外)の全12演目を観劇できるお得なパス。 ¥15,900

◎学生パス(新設・限定数販売)
主催+公募プログラム(海外)からお好きな作品をいくつでも観劇できる学生用パス。 ¥10,000

◎F/Tパス

主催+公募プログラム(海外)すべてを楽しむためのお得なパス。 ¥32,000

◎ペアチケット

チケット2枚分の料金から10% OFF

◎学生チケット、U18チケット

学生の方、18歳以下のためのお得なチケット。

※一部対象外演目あり

■チケット取扱

○F/Tチケットセンター

電話：03-5961-5209

受付時間：12:00-19:00

※会期中無休、
10/5から11/8までは水・日定休。
(10/5(土)のみ10:00より受付)

オンライン予約

<http://festival-tokyo.jp>

(24時間利用可能)

詳細は

F/Tウェブサイトでご発表いたします!

フェスティバル/トーキョー組織委員

天児牛大	振付家、演出家
萩田伍	アサヒグループホールディングス株式会社 代表取締役会長 兼 CEO
扇田昭彦	演劇評論家
永井多恵子	公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター会長
蛭川幸雄	演出家
野田秀樹	演出家
野村萬	狂言師
福原義春	株式会社資生堂 名誉会長

(五十音順)

フェスティバル/トーキョー実行委員会

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末昌弘	豊島区文化商工部長
委員	八巻規子	豊島区文化商工部文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事/事務局長
	岸正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝勝己	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井建策、北澤尚登	(骨董通り法律事務所)

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	蓮池奈緒子
事務局次長	小島寛大
制作統括	武田知也
制作	河合千佳、喜友名織江、小森あや、椋山由香、高橋マミ、戸田史子
公募プログラムコーディネート	小山ひとみ
メディア戦略・広報	松本花音
メディア戦略・広報アシスタント	北沢聡子、田村かのこ
オープン・プログラム	藤井さゆり
オープン・プログラムアシスタント	田野入涼子、後藤天
票券	長原理江
票券アシスタント	菅原渚、尹禎敏
チケットセンター	佐々木由美子、佐藤久美子
総務	葦原円花、一色壽好
経理	堤久美子、青木亮子

技術監督	寅川英司
技術監督アシスタント	河野千鶴
照明コーディネート	佐々木真喜子(株式会社ファクター)
音響コーディネート	相川晶(有限会社サウンドウィーズ)

アートディレクション+デザイン	アジール(佐藤直樹+中澤耕平+谷陽子+徳永明子+菊地昌隆)
ウェブサイト	濱田真一+北島識子+佐藤祐花+重松佑(株式会社ロフトワーク)
パブリシティ	平昌子、望月章宏
海外広報・翻訳	アンドリュース・ウィリアム
物販	渡辺淳
編集・執筆	鈴木理映子

広報用写真

広報用の舞台写真（新作上演の場合は過去作）をご用意しております。
 ご使用希望の媒体は、1 希望演目（画像）のタイトル、2 媒体名、3 掲載予定時期を表記の上、
 press@festival-tokyo.jp 担当：松本、平、望月までメールにてご連絡ください。

- ※ご使用時の注意点とお願い
- ・ご利用になる場合は、写真家のクレジットを必ず併記してください。
 - ・トリミングおよび加工は原則不可です。

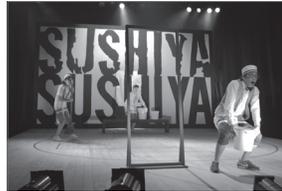
※公募プログラム、オープン・プログラムの各演目についても広報用写真のご用意がございます。



「バラバラな生体のバイオレーション！～エマーゼンシー」(F/T12公募プログラム)
 © Tsukasa Aoki
『オーバードーズ：サイコ・カタストロフィー』
 シアタースタジオ・インドネシア



© Kazue Kawase
『四谷雑談集』+『四家の怪談』
 中野成樹、長島 確



京都×横浜プロジェクト2012
 『義経千本桜』より『鮮屋』の場面
 2012年7月京都芸術劇場 春秋座
 © Toshihiro Shimizu
『東海道四谷怪談一通し上演一』
 木ノ下歌舞伎



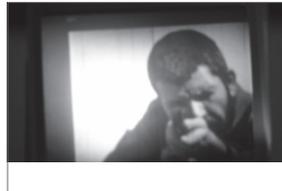
© Masahiro Hasunuma
『東京ヘテロトピア』
 Port B



『女王の器』 © Tsukasa Aoki
『永い遠足』
 サンプル



『雲に乗って』
 作・演出：ラビア・ムルエ



『ピクセル化された革命』
 作・演出：ラビア・ムルエ



© Rabih Mroué
『33rpmと数秒間』
 作・演出：リナ・サーネー、ラビア・ムルエ



© Tsukasa Aoki
『現在地』
 チェルフィッチュ



遊園地再生事業団
 『ジャパニーズ・スリーピング／世界でいちばん眠い場所』
 © Nobuhiko Hikiji
『光のない。(プロローグ?)』
 演出：宮沢章夫



『帰ってきたDr.N』 © The Japan Foundation/
 Photo: Keizo Kioku
『光のない。(プロローグ?)』
 演出・美術：小沢 剛



© Sandra Then
『100% トーキョー』
 リミニ・プロトコル



© Hugo Glendinning
『The Coming Storm』
 『嵐が来た』
 フォースド・エンタテインメント



© JEFF BUSBY
『ガネーシャ VS. 第三帝国』
 バック・トゥ・バック・シアター



© Yuya Tsukahara
『石のような水』
 作：松田正隆
 演出・美術：松本雄吉